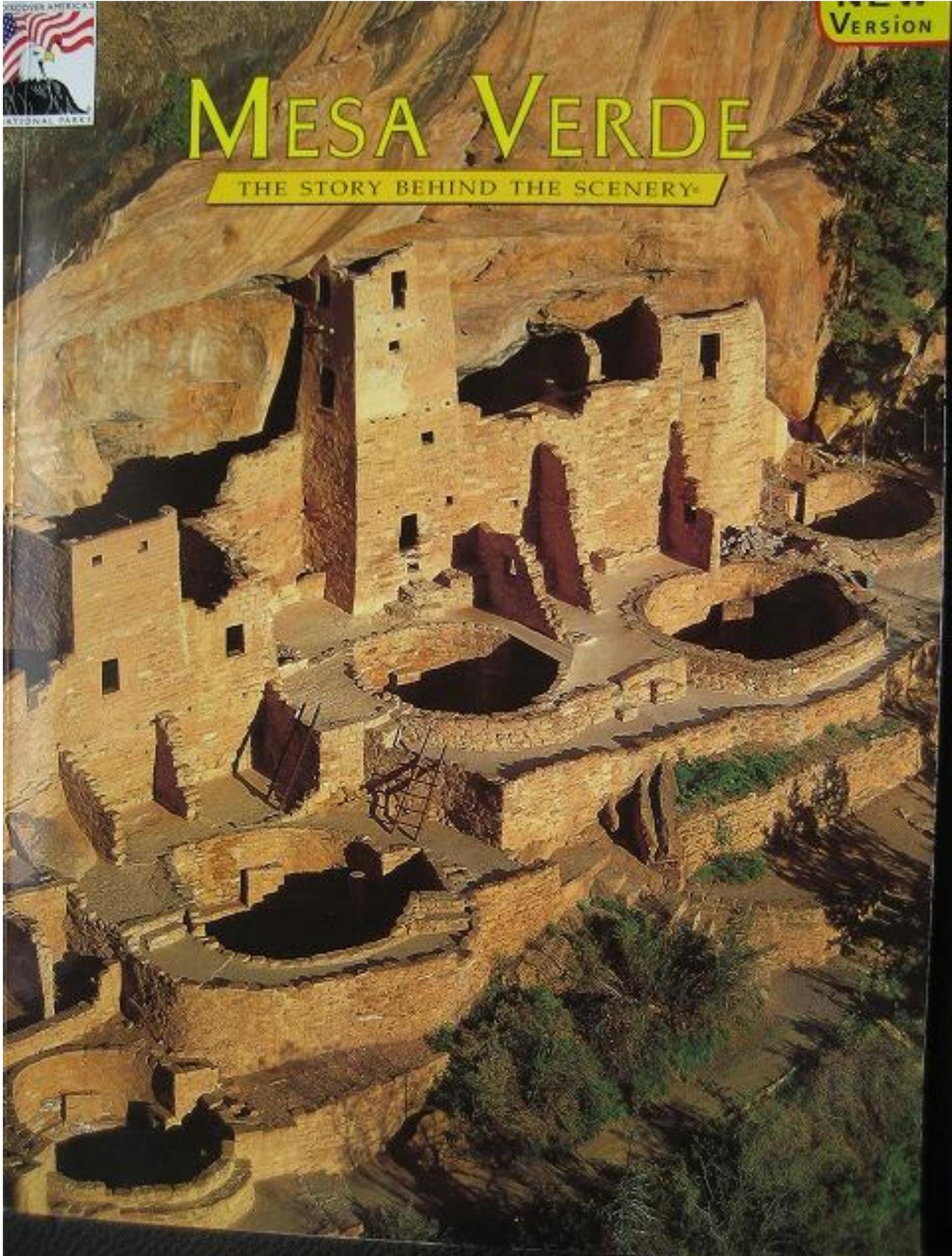




NEW
VERSION

MESA VERDE

THE STORY BEHIND THE SCENERY





メサ ベルデの緑の平地は、文明と神秘の中にまとめられた場所なのである。プエブロ族の先祖達の歴史的に意味のある建築技術から、隠された崖の集落の歴史的な発見に至るまで、そこは、何世紀にもわたり、人々が農作物の栽培をし、夢を見、礼拝をし、思い悩み、栄えてきた場所なのである。その貴重なもののほとんどは、発掘され、ほかに移されたが、しかしなおも、その場所の容易に忘れることのできない神秘性は、遠い昔からずっと明らかにされずに残っているのです。

この本は、自然を征服するための敵とか、破壊するための対象ではなく、限りない知識の宝庫として、そして、過去から現在に至るすべての事柄と人々とを結びつける体験をする場と考えている人々、すべてに捧げるものである。そういう人たちは、自然の環境を守ることが、われわれの良き将来のための基本であるということを良く知っている人たちなのだ。



Mesa Verde

景 色 の 裏 に あ る 物 語

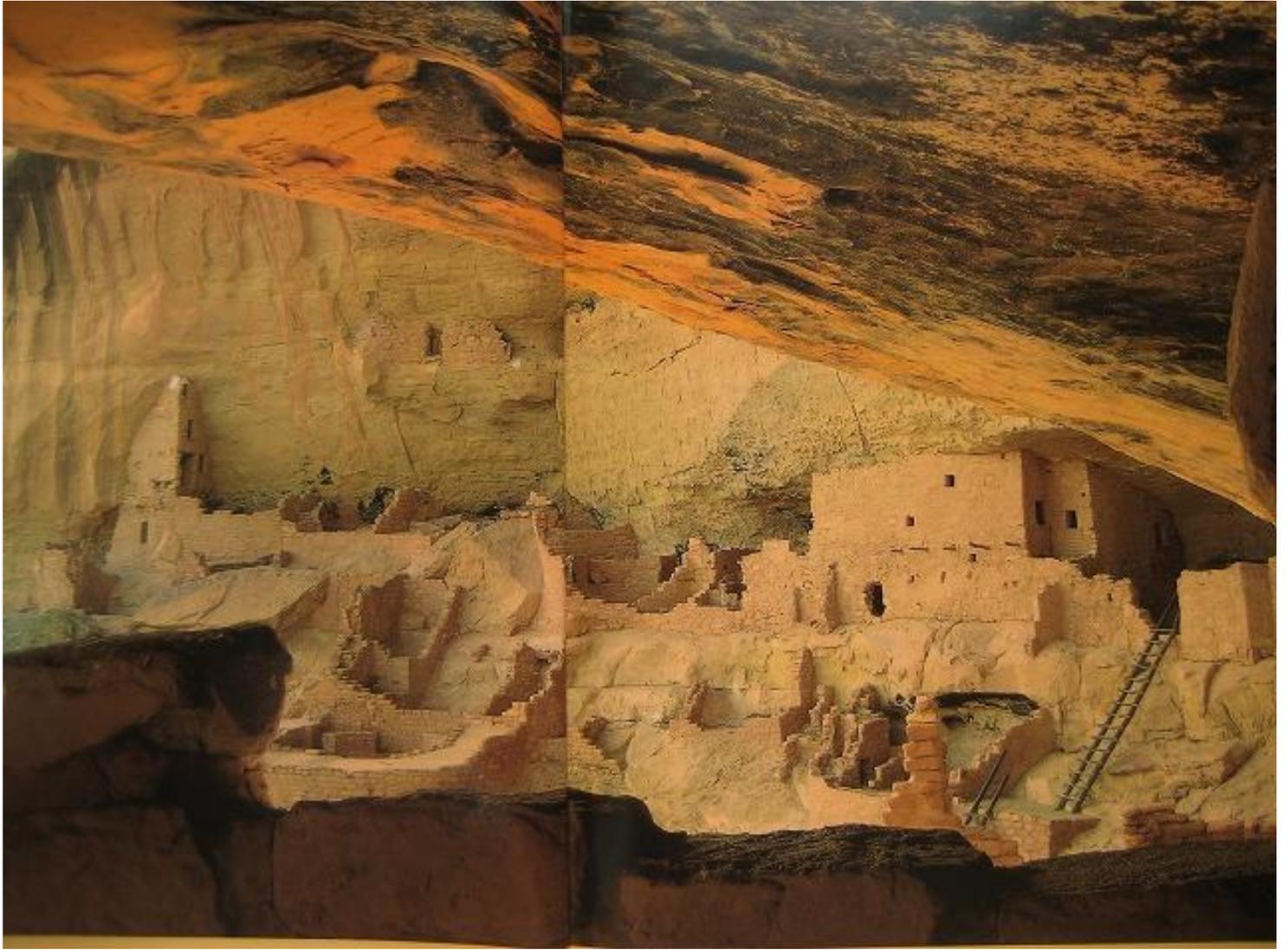
by Linda Martin

Linda Martin “ネブラスカからやってきた農家の少女”は、Creighton 大学の卒業生です。Linda は、すでに 33 年間で Mesa Verde National Park で働いています。そして、彼女は、渓谷やフォーコーナーズ領域に隠された奥地を歩き、探索することが許され、彼女の興味が、その領域に残っている原住民アメリカ人の文化というものに置かれているので、彼女は、今も、ここで研究を続けているのです。

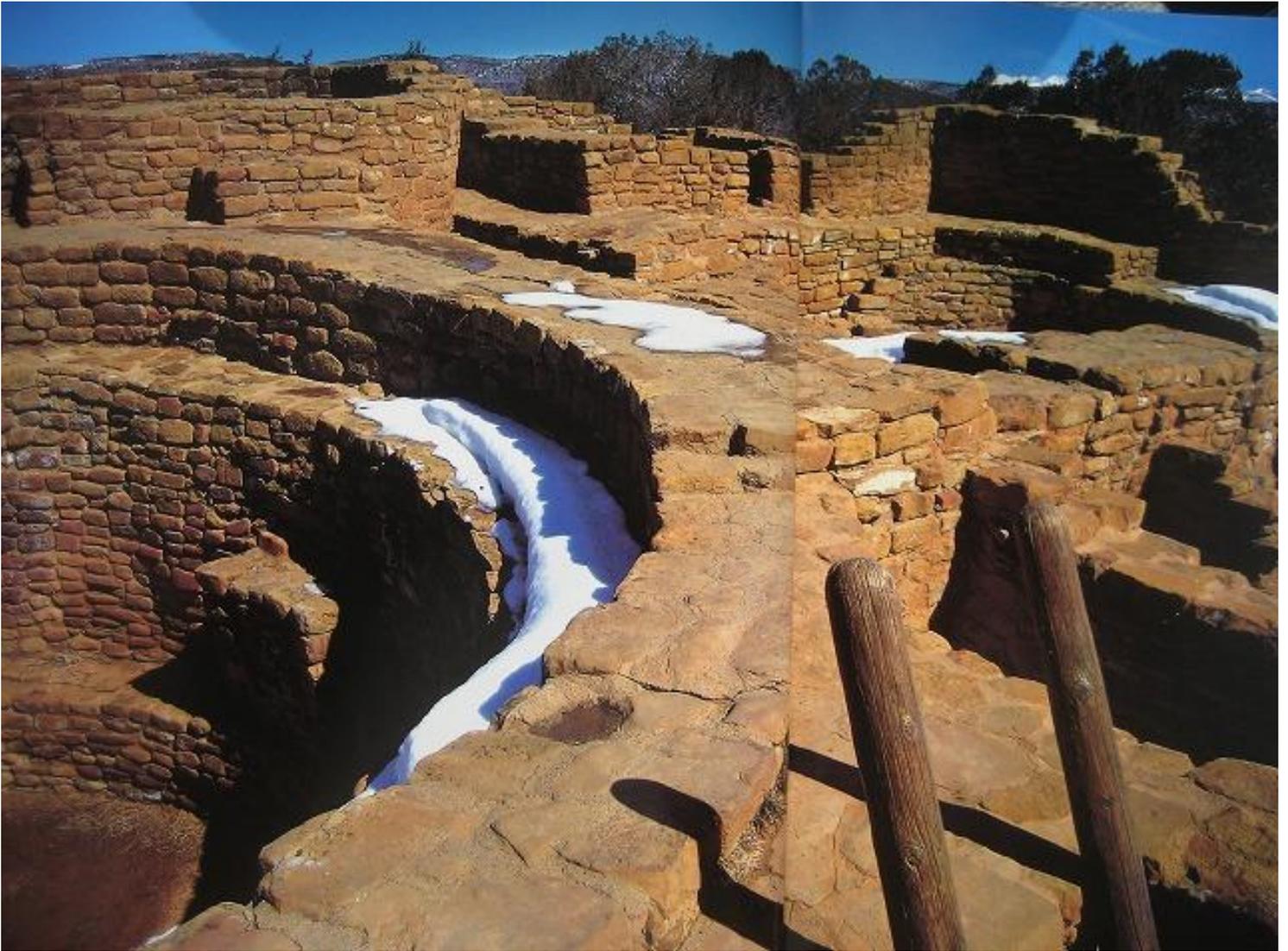
Mesa Verde Nation Park は、コロラド州の南西部に位置していますが、ここは、1906 年に、アメリカ合衆国にある最も注目すべき、かつ、最もいい状態で保存されている崖に作られた住居で、これを保護し、有史以前の文化についての様々な研究をするために、国立公園として指定されました。

表紙: 崖の宮殿、Bruce Hucko 撮影。裏表紙 昼下がりの太陽に当たったバルコニーハウス、 Bruce Hucko 撮影。ページ 1 ビナンマツ、John P. George 撮影
ページ 2/3、ウェザーリル メサの長屋、Tom Till 撮影

編集 Mary L. Van Camp .デザイン K. C. DenDoovn



メサ ベルデの自然は、がけに作られた住居のイメージ、もしくは、その雰囲気
を心に描いた、そして、それを後世のために保護しようという芸術家のようなも
のである。空は、太陽が近づいて来たときには、不思議な光を次第に明るくしな
がら、薄赤く一茶色の砂岩の壁に輝きを注いでいるのである。



遠景の住居の壁に雪の斑点がある

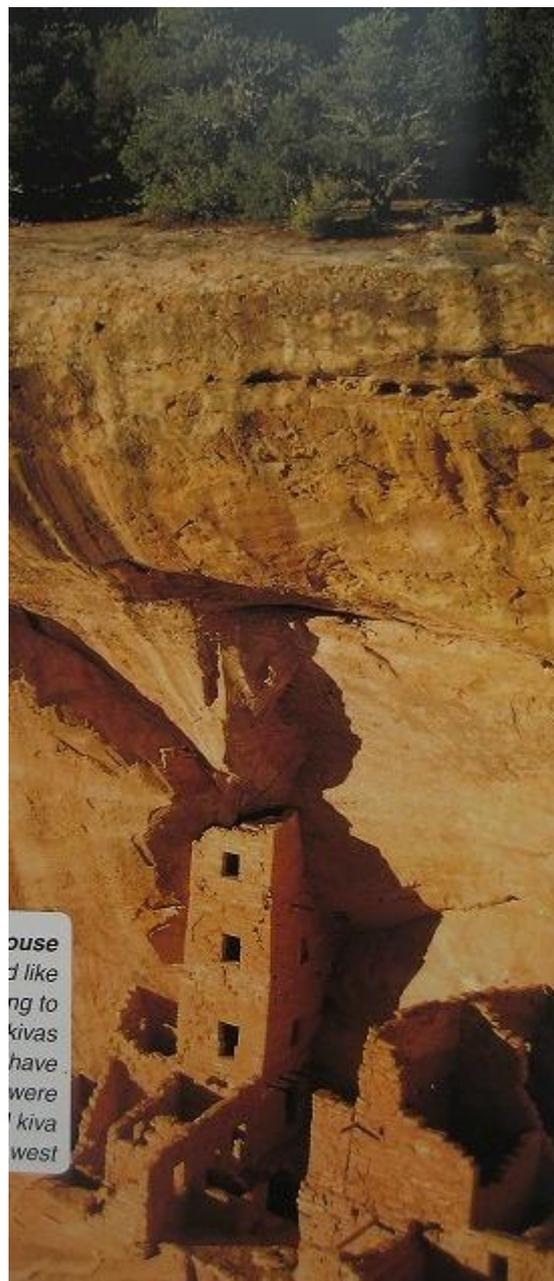
すばらしいメサの頂上あたりからは、ここを取り巻く周りの地域の眺望が開けている。

メサ ベルデの台地は、人々や、動物たちが、青々と茂った台地の上面と谷の環境の恩恵を被るように招きながら、ほとんど、一年中太陽の光の中で輝いているのです。ほとんどの人は、学校で学んだこのがけの住居を探しにここにくるのですが、その誰もが、彼らを迎えてくれる、ここに育つさまざまな植物や野生の生物に驚きを感じるのです。先祖代々のプエブロ族の人たちが、ここに、何百年もの昔に住んでいたということは、何の不思議なことでもありません。この豊かな自然のある居住地が、何世紀にもわたり、彼らが繁栄することを可能にしたのです。彼らの生活の場所は、彼らが彼らの時間を、優れた技術で、容器、装飾品、かご、そして、石製の道具を作ることに専念するに十分なだけ、安全だったのです。彼らは、今日でも彼らの子孫により受け継がれ、行われている手の込んだ宗教的儀式を確立しました。彼らの高度な完成した工作の技術は、石器時代の人々にはまさに驚きのものでした。メサ ベルデは、まさに、お互いが調和をしていた人々と自然の生きた遺産なのです。

メサ ベルデの物語

メサ ベルデ ナショナルパークは、こうしたシステムのなかの唯一文化的なパークとして特別な意義を持っています。そして、ここは、近代的な技術が決して、その人間ドラマを征服することのない極わずかな場所のひとつでもあるのです。私たちは、科学者として、その建築学のデザインや、農業技術、通商網、あるいは、入れ物容器の製作技術を説明することができるのです。また、私たちは、歴史学者として、人間の歴史の、すべての断片の記録をとることが出来るのです。しかしながら、人として、私たちは、決して、先祖代々の、プエブロ族の人たちの希望とか、要望、欲求、そして、望みを知ることは出来ません。何よりも、彼らは、今日、私たちが持っているものと同じような偏見と問題を持った人たちであったのです。われわれは、彼らが生み出したものの保管人であり、プエブロ族の先祖たちの創意工夫に感歎するに違いないけれども、しかし、このメサ ベルデの永遠の仕事というのは、ここを訪れた人たちが想像を膨らませることが出来るようにするという事である。

クリフ・パレスと同じように、このスクウェア・タワーも、側面に日の当たる部屋のあるアパート家屋の機能を持った四階建ての建物である。この大きな住宅地には、80程の部屋と7つのキバが含まれている。キバのうちの二つには、原型のまま残った屋根の一部が見られる。それらは、スプリングスにあるキバの再建の見本として使われた。乾燥した南西部の気候が何世紀にも渡る自然の気象条件の中でこれら木材が完全な形で保管されることを可能にしていた。



メサ ベルデを 訪れる誰もが、 想像を膨らます ことができる

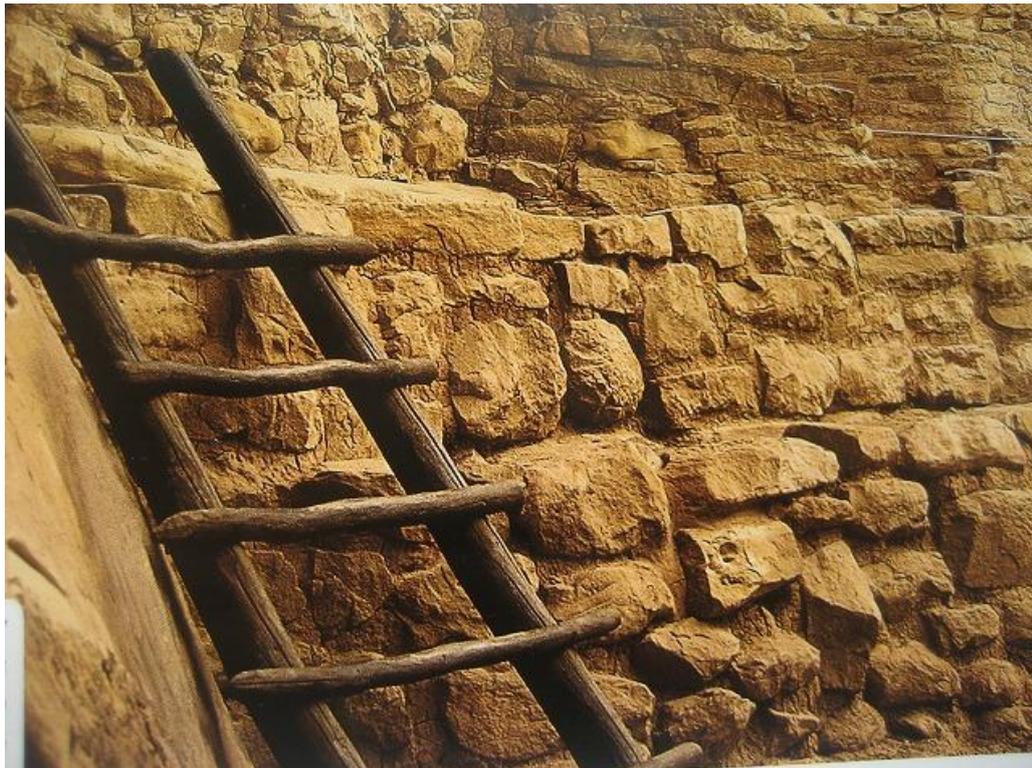


芸術的なデザインが施されたメサ ベルデの黒と白を基調とした容器

こうしたデザインは、取っ手のついたジョッキ、ボール、ひしゃく、そして、水筒などに使われていた。その美しさは、13世紀においてもそうであつたに違いないが、今日でも賞賛されているものである。粘土を焼いた容器は、日々の生活の、必需品の一部をなしていた。こうした容器に装飾をつける技術は後になって発達したものである。しかしながら、人々がそのように動いていったときには、必要性そのものは、単純に後に取り残されていった。

ウエザリル メサのステップハウス

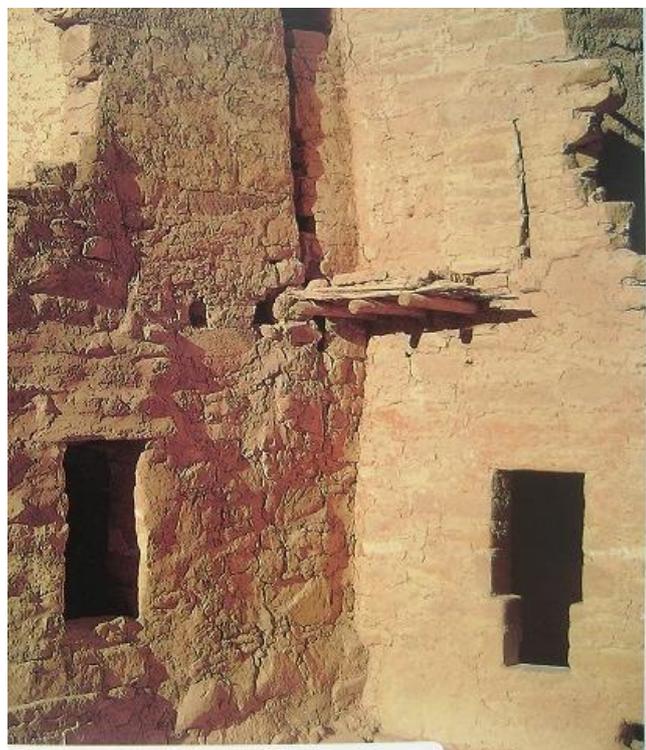
私たちは、かご作りの人たちとプエブロ族の時代の折衷を見ることが出来る。それぞれの階は、下の階からステップバックしたような形に作られていた。—これが、ステップハウスの由来である。この建設技術の特徴は、メサベルデ ナショナル パークに見られる遺跡のなかに非常にたくさんのもので見ることができます。



AD1100 から 1300 年までが、偉大なるプエブロ族の時代に相当しており、メサ ベルデの、プエブロ族の祖先たちの“黄金時代”である。

プエブロ族の祖先の文化遺産

崖に作られた住居—古代の石作りの家は、崖の窪んだところに住居を構え、なにか神秘的に覆い隠したような形でした—は、ほとんど、メサ ベルデ ナショナル パークのものと同類のものです。ここを訪れる訪問者たちは、誰もが必然的に、タワーの壁と威風堂々たるそのつくりを見たくなるものです。彼らは、このような不思議な建築物を作った古代の人たちの知恵に、ただ、ただ、驚くばかりです。崖にできた住居は、全体のメサ ベルデの物語からすれば、それは、まだ、ほんの一部に過ぎないの



バルコニーの一部

スプルス・ツリー・ハウスの壁面から突き出た形になっている。このバルコニーは、一つで 20 フートくらい長さまでなっているものもある。こうした場所にある上るはしごは、二階の部屋に走る通路としての役割をしていた。

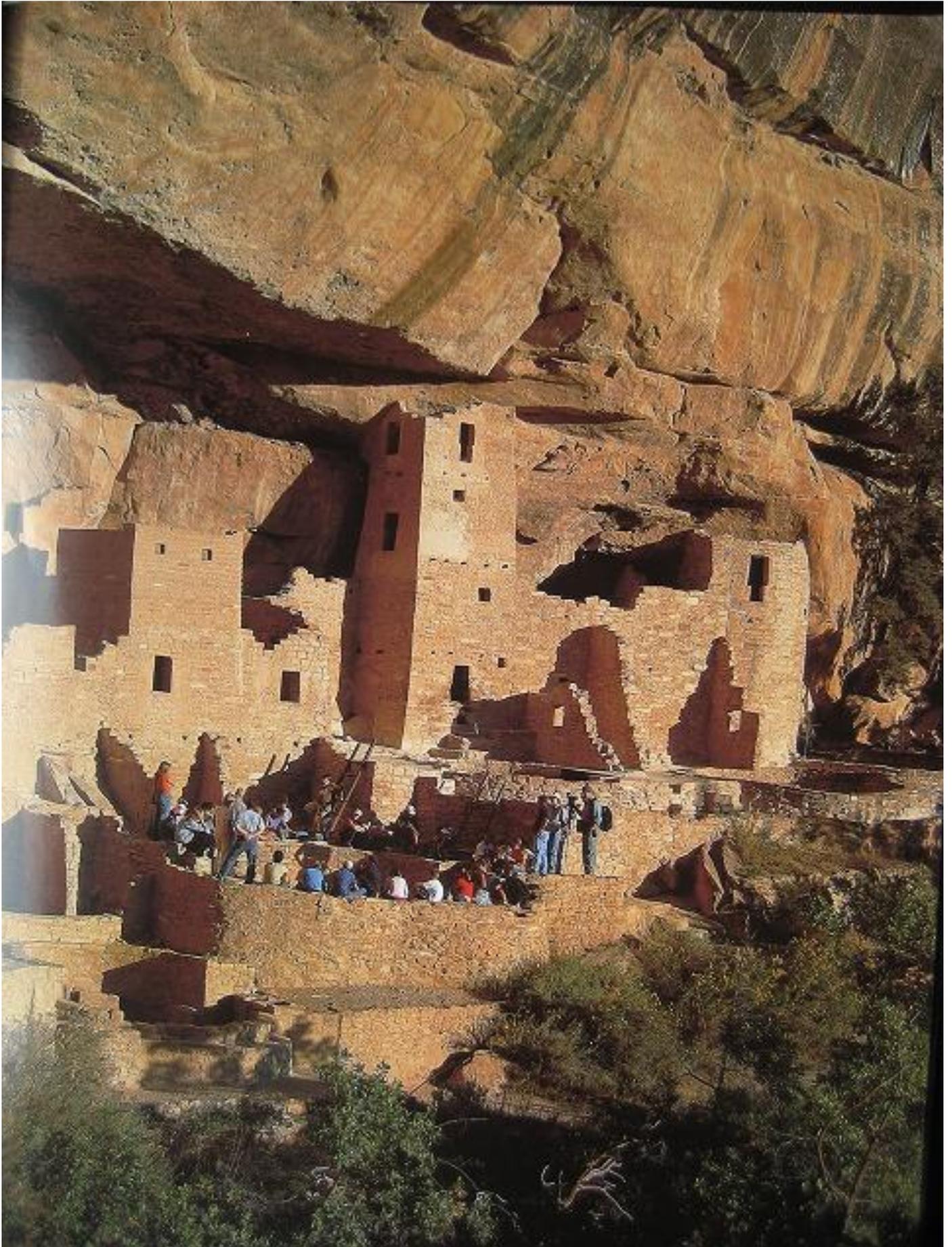
です。それらは、実際には数世紀にも及んだ市民生活の、わずかに最後のほうの 75~100 年足らずのあいだのものなのです。いったい、ここにいた人々とは、どんな人たちだったのでしょうか？ なが、彼らをここに住むようにさせたのでしょうか？ どうして彼らは、ここから突然消えたのでしょうか？ こうしたことが、このメサ ベルデとそこにあった有史以前の文化を取り巻いている謎なのです。

このプエブロ族の祖先に関する疑問があまりにも沢山、答えのないままになっていることに多くの訪問者たちは、いささかの苛立ちを覚えるほどです。ひとつの集団として、アメリカ人たちは、科学的な知識というものは、どんなことでも解明できると思いついで、答えをたびたび確信してきたものです。多分、われわれが、崖の住居というものがなぜ作られたのかということ、そして、この部族に何が起きたのかということについて知っている事実に基づいたわれわれ自身の勝手な理論を想像し、思い描いているように、この歴史に字になったものが存在しないということが、思いもかけぬ贈り物となっているのである。

メサ ベルデの地域に最初に住人がやって来たのは、10,000 年そして、自然に実った植物の食料を収集して生活をしていた。考古学名残をほとんど残しては居ないけれども、こうした人々についてのさ：数千年続けた後に、彼らは定住生活の様式に適合していったのです。

崖の宮殿に行くガイドツアーは、単に、800 年前からの生活の様式の詳しい説明をするだけではない。このツアーでは、こうしたプエブロ族の祖先の家を保護することにも貢献しているのである。

(次ページ)



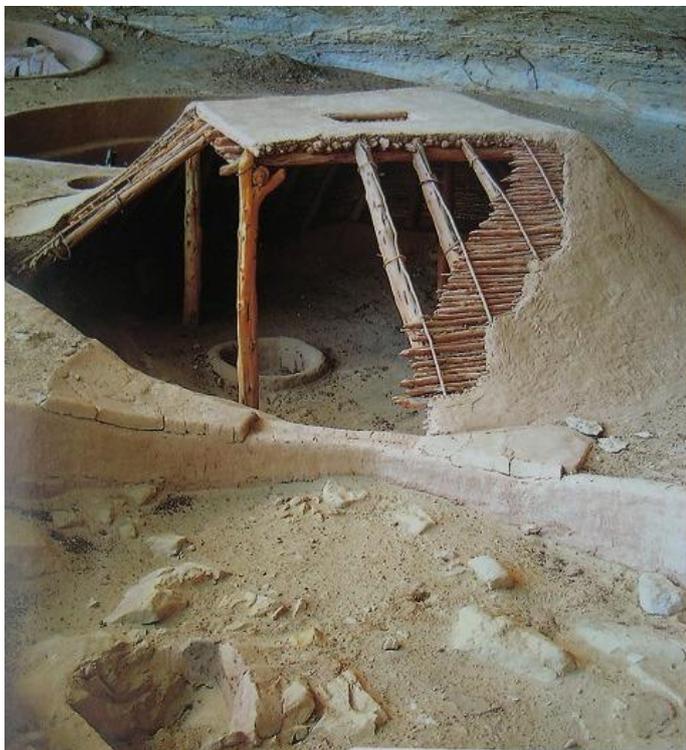
この変化が二つの要因：恒久的な住居、ならびに、倉庫の建設と、そして、庭園の耕作(園芸)と植物の栽培、により、明らかになった。人々は、ひとたび、農業による生活の手立てを身につけるようになると、彼らの文化的な、そして、社会的な習慣の中に変化というものがたちどころに続いて起こった。合衆国のフォーコーナーズといわれている地域では、この生活の手段こそ、プエブロ族の先祖たちが持っていた文化の伝統であるといわれた。

プエブロ族の先祖

古代の人たちが、彼ら自身のことをどのように呼んでいたかという記録はないけれども、彼らに対しては、プエブロ族の先祖という言葉が良く使われている。この言葉は、数年の間、どの文

献にも使われていた、ナバホ族の *Anazai* という言葉に置き換えて使われている。近年の子孫たちは、プエブロ族の先祖たちは、彼らの祖先のことをもっと正確に述べていると信じている。

彼らはこの場所を去ったあと、プエブロ族の先祖たちは南、



ステップハウスの中にある再現された堅穴住居

これからもはっきりしているように、屋根の構造は、かご作りの時代のもを応用したものである。その周りの土の高い部分は、外部との遮断をし、湿気を防ぎ、人々の居心地がよいようにする働きをもっていた。

今日のニューメキシコとアリゾナの地域に移動し、リオグランデプエブロ、アコマ、ズニ、そして、ホピなどのメサに定住した。数年が過ぎ、彼らの子孫たちは、これらのグループの中に同化していった。こうした理由により、考古学者たちは、現代のプエブロ族の実態を、考古学的な位置づけを分析したり、彼らについての質問に答えるために、それを利用している。公園保護官たちは、住居の見学ツアーに引率するときには、このことを訪問者たちに喚起しているのだ。

現代のプエブロ族の社会は、しばしば、共通の祖先からの子孫である血縁関係の家族からなった、血縁関係集団によって構成されている。家族の父方の系譜(父系社会)を通して自分たちの先祖をたどるヨーロッパ人の人たちと違い、ほとんどのプエブロ族は、女性(母系社会)を通して、家系をたどっているのである。プエブロ族の先祖の家族では、その中の財産と同様、家の所有者である女を中心とした母系社会であったのだ。一組のカップルが結婚するときには、男の方が、彼の妻の家に入り込み、そして、彼女の血縁集団の一員として加わっていた。

プエブロ族の先祖の農夫は、

とうもろこしやまめ、そして、かぼちゃを育てるための農地を開拓するために、メサの頂上の上のピニオン松や、ビャクシンの木を切り倒していた。大体、150日くらい経つと、肥沃な土地に、特に雨のすくなかった年以外は、たくさんの穀物を収穫することができた。とうもろこしが基本的な食料で、どんな食卓にも、必ず、出されていた。



Tの字をした入り口は、崖の住居には良く見られるものだ

この建築技術は、中庭に通ずる壁に作られていた。こうした入り口は、部屋の出入りを容易にするためとか、あるいは、“T”の字というものが、プエブロ族の先祖たちには何か特別なものの象徴として使われていたなど、現実的な意味を持っていたのではないと思われる。

同じような習慣が、宗教的、ならびに、儀式的活動にも適用されていた。彼らの生活のなかの重要なことが、かなり辺境の地の環境の中で、狩をしたり、農耕をするときに、そして、雨や豊作を祈るときに、繰り返されていた。彼らの神は、毎日の生活のために、植物や、動物、そして、水が手に入ることを保障しなければならなかった。ここに、メサ ベルデのプエブロ族の先祖たちを考察するとき心にとどめておかななくてはならない、大事な概念がある。

訪問者たちの間から、いつも、このプエブロ族の先祖たちは、どの程度の大きさであったかという質問がある。平均的な男たちは、背丈が5インチ4フィートから5インチ5フィートで、これに対し、女たちの平均は、5インチから5インチ1フィートであった。

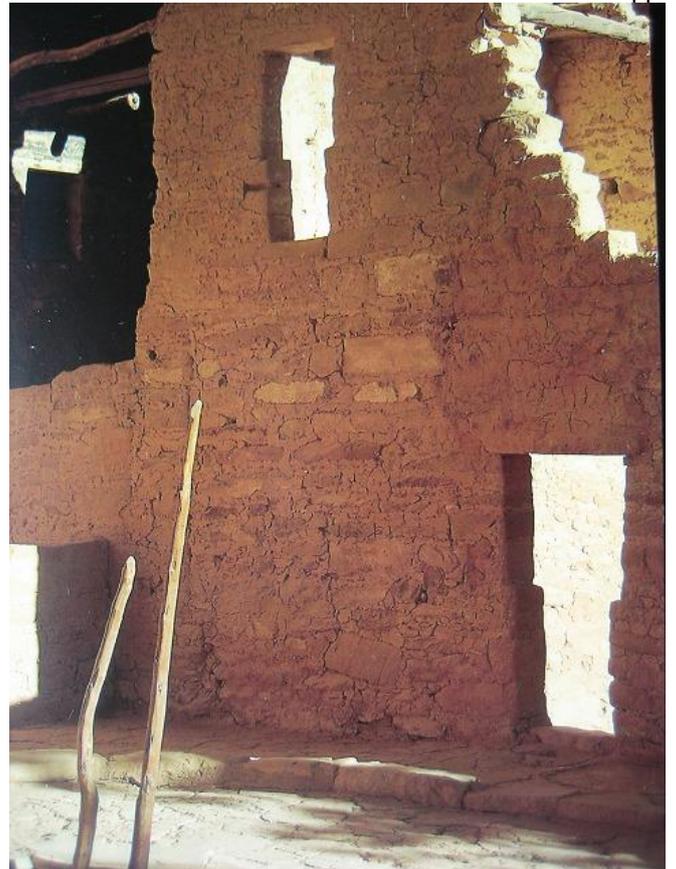
たくさんの墓地からの発掘では、彼らは、まっすぐに伸びた髪をしており、女たちは、時に、短く刈っていた。そして、彼らは、毎日の生活の中での厳しい仕事に適応できるような筋肉質の体つきをしていた。平均的な寿命は、かなり短く、一大体、32 - 34歳一、中には、長生きして、40歳とか50歳代のものもいた。幼児の死亡率が高かった；子供たちの50パーセントが、5歳になるまでに亡くなっていた。女性たちの寿命が、出産が非常に危険であったために、男性よりもかなり短かった。こうした統計的な数字は、訪問者たちには不思議に思われるようだが、その当時のヨーロッパにしても、体の大きさは同じようなものであり、寿命も似たようなものであった。

プエブロ族の先祖たちの死因というのは、関節炎やリウマチから貧相な介護状況と歯の崩壊までと、幅広いものであった。発掘された骨の実物には、時々、歯が、噛み作業で骨まで磨り減っているものや、あるいは、歯が完全に欠けてしまったものなどがあった。こうした人々は、おそらく、痛みや苦痛から解放されるために、穴の開いた歯を引き抜いていたのであろう。鉄分のような栄養素は絶えず欠乏していた。また、ある人は、動くのに痛みを伴う骨折にも耐えていた。こうした困難なことすべてが、彼らが強いられた生活様式の典型的なものとなされている。

かご作りの伝統

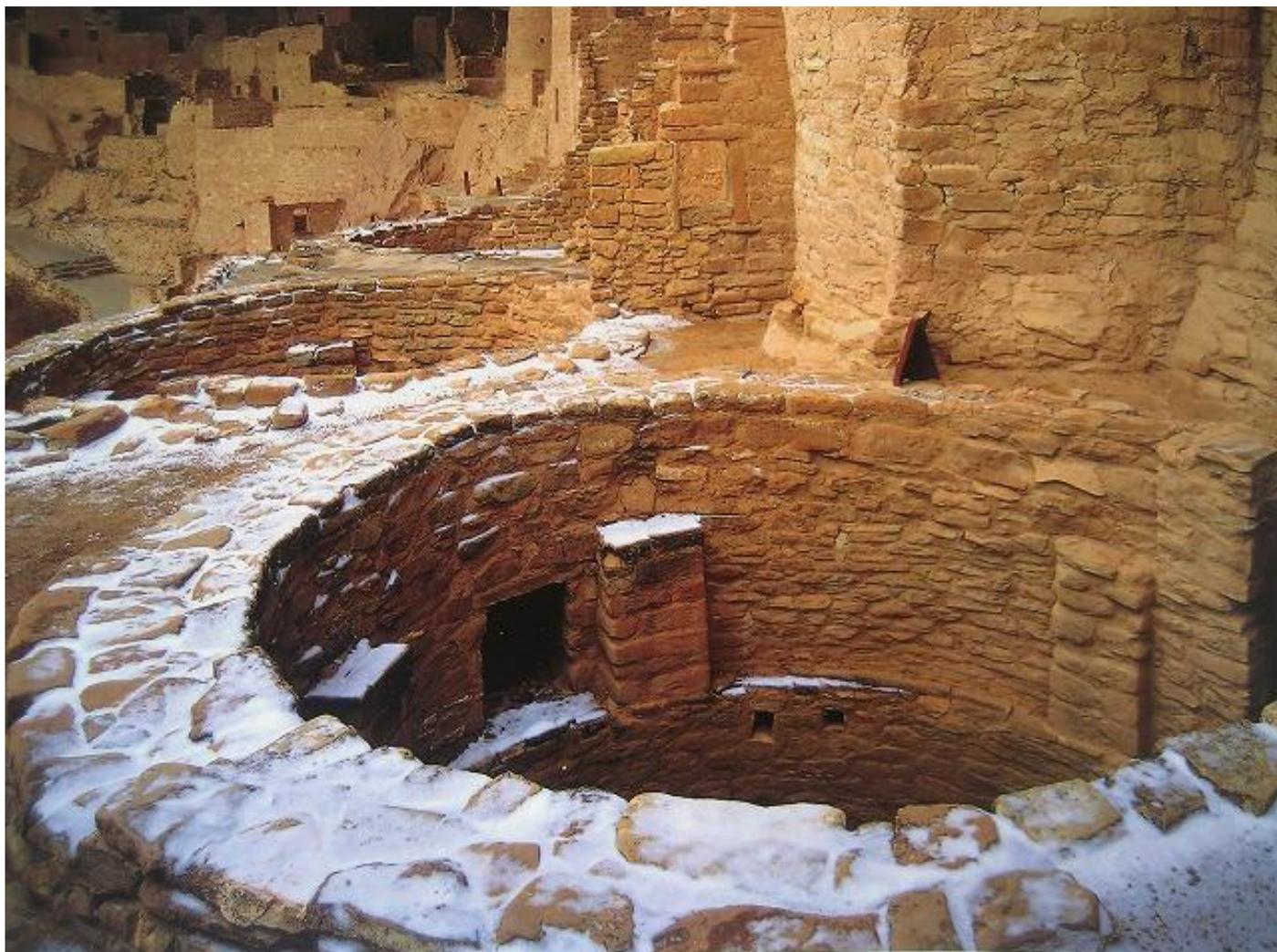
プエブロ族の最初の祖先は、“かご作りの人達”として知られているほど、かご作りの技術にすばらしいものがあった。沢山の彼らよるかごは、水も漏らさぬほど巧みに編まれていた。さらに、彼らは、ユッカの繊維を使って編んだサンダルなども作っていた。このかご作りの人達は、アトラトルと呼ばれる槍を投げて狩りをしていた。そして、種、豆の実、ベリーなどを集めていた。たまに、彼らは、食料を、石を並べた穴に蓄えたりできる狭い岩の家に住んでいた。考古学者たちは、この公園の中のどこにも、このかご作りの人たちの住居を配置していなかった。

AD550年までに、崖の洞穴や、メサの台地の上に、メサ ベルデの職業と同化するような形で、かご作りの人達の子孫が生活を始めた。ここで、かご作りの人達の子孫は、やはりかご作りをしていたが、しかし、彼らの文化の発展につながるような非常に重大な新しい考え方を学んだ — それは、容器作りである。容器は、食料を、単に早くというだけでなく、より効率的に、加工したり、料理するのに便利であった。



崖の洞穴は、冬になると寒く、悲惨な場所であった。

日が短く、そして、夜は、温度がゼロ度以下になった。プエブロ族の先祖達はスノーブーツをもっていたが、雪嵐の中では動くまわることではできなかった。おそらく、キバは、長い冬の間は、寝るのに都合に良い場所だったのであろう。地下の部屋のこうした快適な場所で囲炉裏を取り囲みながら、人々はいろんな話をしていたのだろうということは容易に想像つく。



プエブロ族の祖先たちは、メサの台地の上や、洞穴に堅穴住居と呼ばれる半地下の住居を作っていた。とうもろこし、大豆、そして、かぼちゃなど、南西部の、三つの主食の野菜の栽培で農業が発達していた。そして、彼らは、アトラトルの投げ槍の代わりに、弓矢を使うようになった。こうすることにより狩猟の成果が一段と飛躍した。また、七面鳥も家畜として飼っていて、食料としたり、その羽を利用していた。堅穴の住居は、崖に作られた住居ほど印象的というわけではないが、しかし、この時代に、すでに、訪問者たちがびっくりするほど発達した農業の基盤ができていたのである。

プエブロ族の職業

AD750 年ころになると、プエブロ族の先祖たちは、大地の上に作った堅穴の住居を置き換え始めた。そして、新しい場所に住居の建築を場占めたのだ。プエブロの時代は、垂直な壁と平らな屋根を持った連結した部屋が列を作っていたことに特徴がある。こうした、L の字、もしくは、U の字になった家の前には、プエブロ族の先祖たちは、基盤となる台地の上、あるいは、下に作られていた部屋とは分離された建築構造をした、深く掘った部屋をつくっていた。

この地下の部屋は、後に、ホピの言葉で、”キバ“という名で知られている儀式を執り行う構造に進化していった。台地に作られた家は、砂岩のブロックと年度のモルタルを使った石工技術の部屋に発展していった。こうした、建築技術が完成されていく過程は、さらにしっかりした血縁関係社会とか、宗教的な儀式が進化していったことを意味していた。

プエブロ族の住居が時代とともに発展したというわれわれの興味ある局面は、ゆりかごの台に見られる変化にあった。進化し

た籠作りの人たちの時代には、幼児の頭を保護するように、それらは柔らかく、当てものをしたものであった。これに対して、新しい、ゆりかご板は、赤ん坊の頭を平らにし、顔を広げるために、堅い板であった。多分、ファッション的な意識から、プエブロ族の人たちは、これが、彼らをもっと美しくするという意識を持っていたのだろうということを知っているだろうか!

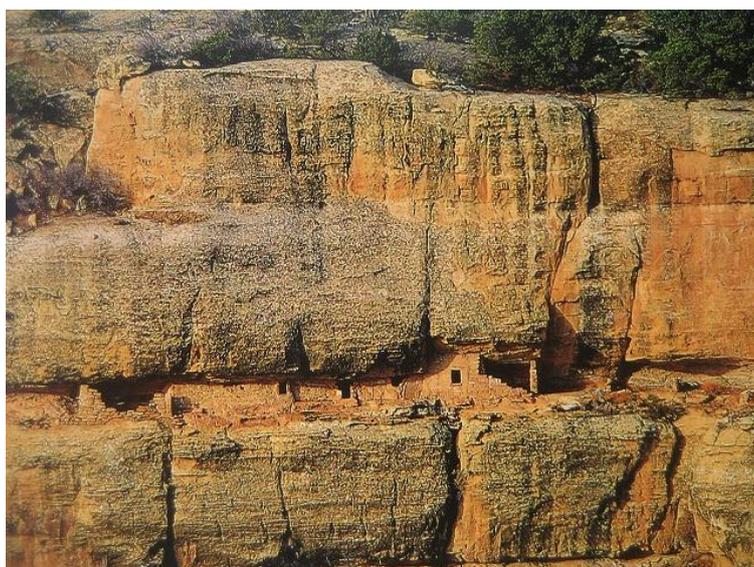
容器作りの技術は、より進化したプエブロ族の文化の時代まで改良されていった。事実、こうした容器を分析するということは、考古学者たちが、プエブロ族の先祖達の職業を時代付けることができる一つの方法なのである。細部とデザインに見られる変化が、文化の発展についての彼らの追跡を可能にしている。たとえば、発展したプエブロ族の時代には、プエブロ族の先祖達は、台所で使うために、波形状の容器をつくっていた。そうした容器の上には、荒れた概観の上に粘土をつけるため、彼らは、指で表面をつまんでいた。訪問客は、Chapin Mesa Archeological Museum に展示されている、代表的なメサ ベルデの黒と白の容器と、この波形状容器との間の変化を確認することができる。

変化していったかご作りの人たちも、また、発展したプエブロ族の人たちも、どちらも、独立して暮らしてゆこうとはしなかった。彼らは、食料を得るために移動をしなければならなかったけれども、交易網を懸命に築き上げたという証拠がある。発掘したもののうち、黒い容器とともに、赤い容器があることが分かった — 部分的な粘土に色づけをすることは、こうしたものはできない。プエブロ族の先祖たちは、綿の繊維を編むこともしていたが、しかし、メサ ベルデの気候は、綿の木が育つには適していなかった。それらは、アリゾナに北部地域の部族との取引を通して持ち込まれたものに違いない。

メサ ベルデで見ることのできるトルコ石のほとんどのものは、もともとは、ニュー・メキシコのサンタフェとアルバカーキの間のセリロス・ヒルから来たものであった。貝殻のビーズとか、プレスレットなどは、カリフォルニアのような遠くから来たものであった。もちろん、疑いもなく、物事の考え方などと言うものの交換も行われた。プエブロ族の先祖達は、他の部族の人たちや文化について、ちょうどわれわれが今日抱くのと同様、それらに大変な好奇心を持っていたに違いない。

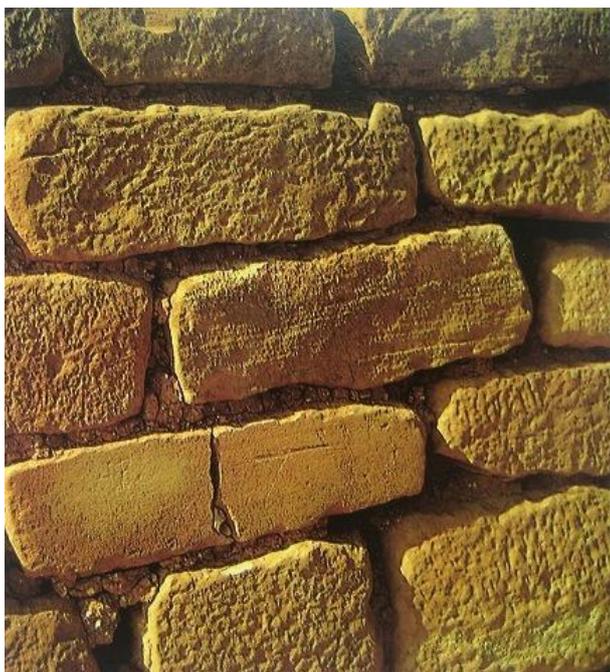
プエブロ族の大発展の時代

AD1100 から 1300 に掛けては、プエブロ族の大発展の時代で、このメサ ベルデにいたプエブロ族の先祖たちの“黄金時代”なのである。このころに、この時代の始まりとなるような、顕著な変化があったわけではないが、しかし、それよりむしろ、それ以前の時代に出てきた、様々な文化の要素の洗練が起きた。こうした文化の絶頂期の最も注目すべき原因は、農耕技術の完成ではなからうかと思われる。沢山の品種改良されたトウモロコシを使って、プエブロ族の先祖達は、豊富な収穫を手にすることができるようになった。彼らは、そのころ、すでに、排水溝の堰きとめダムを作り、これにより、より沢山の穀物が育てられていた。こうして、耕作地の面積を増やすことにより、プエブロ族の先祖達は、芸術とか、工芸、宗教、さらには、社会的な組織のために、より多くの時間を集中させることができたのである。



沢山の窓の開いた家

小さな崖に作られた住居には、こうした沢山の窓が見られる。狭くて危険な崖に挟まれたようなほかに穴には近づくことがなかなか難しい。こうした住居はメサ ベルデの溪谷のいろいろな高さのところに散在している。この写真の住居には、15 ほどの部屋があり、15 人から 20 人くらいの人が住んでいた。プエブロ族の先祖達は、毎日のように、このメサの台地の上まで上がっていった。



プエブロ族の先祖達の石細工の技術は、かなり精巧なものであった。

彼らの優れた石細工の技術は、滑らかな壁を作り、その表面仕上げもたいしたものであった。他の部族のものは、見せかけだけだった — 仕事に対する人間性のようなものがあつた。

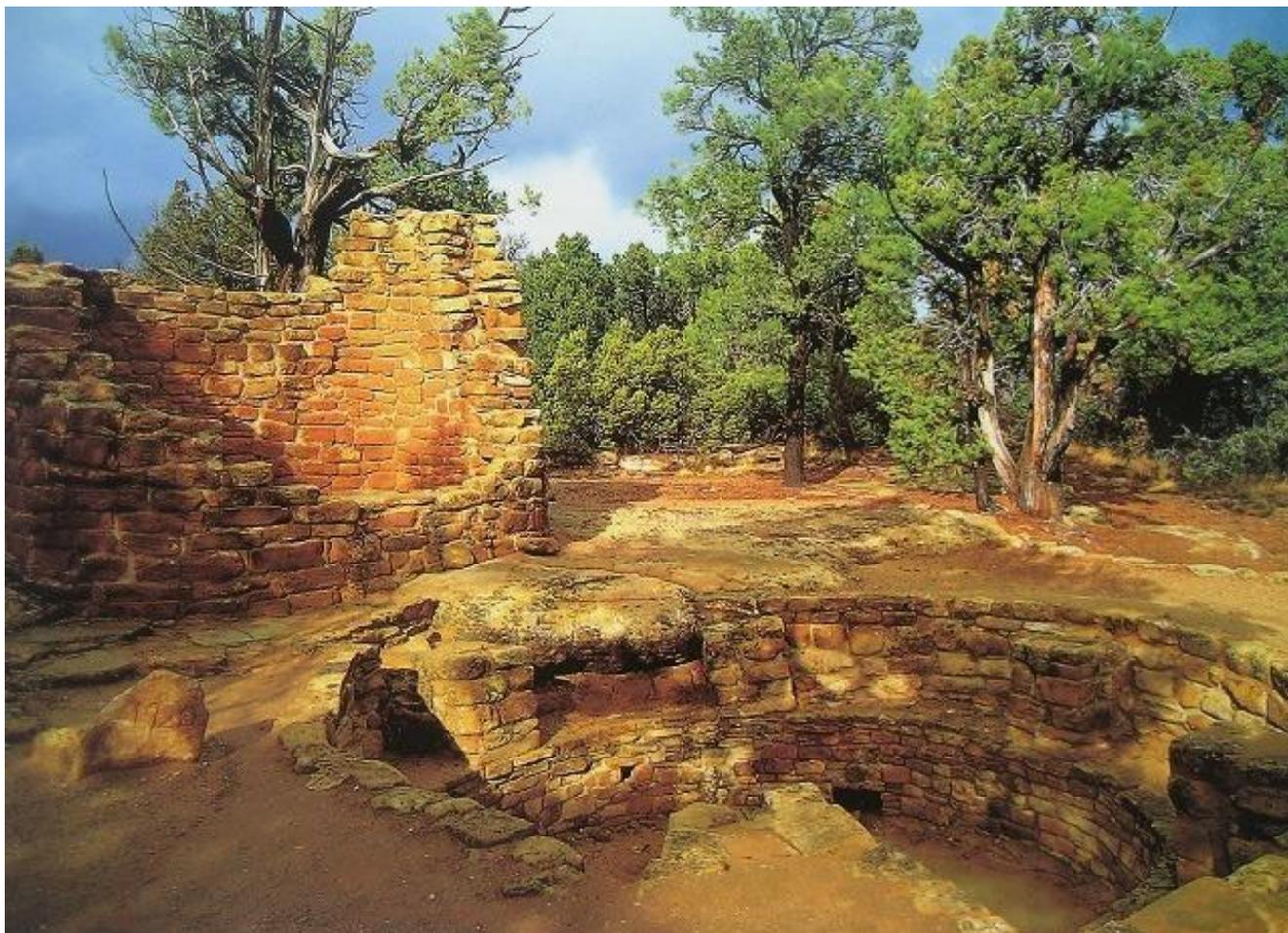
プエブロ族の大発展の時代に、彼らは、メサの台地の全体に広がっていた小さくて、分散された村から、大きくて、もっと密集した、共同体に移っていった。そして、住居は、沢山の階を持った構造になり、時には、四階建てのような高いものまで作られた。沢山の居住用の家から離れた広い土地に作られていたキバは、村を囲む壁の中に作られるようになった。そして、キバの屋根は、なかでの仕事に集中できるように、広場で密閉する形になっていた。石造りのタワーがあり、これは、キバとはトンネルで繋がっていたが、これは、外を見張るためか、あるいは、何かの合図を出すため、それとも、ある種の、象徴的宗教の信仰のために作られたものであろう。タワーは、周り

の景色が良く見えるような一番いい場所に作られていた。

古い時代には、家を建てるために使われていた石は、粗く刻まれたもので、大きさもまちまちであった。ある場所では、かなり均等に刻まれた楔型をした石が含まれていたものもあるが、しかし、プエブロ族の大発展の時代には、家を建てる者達は、次第に、一定の大きさの、長方形の石を積み重ねるようになっていった。彼らは、石を削りとり、それを表面に、くぼみ効果ができるように、つついて削ってゆき、石の形を整えていた。こうした石は、見栄えが非常によく、— 職人の技を楽しませくれる！ こうして作られた石は、組み建てるときにあまりモルタルを必要としなかった。プエブロ族の先祖達は、モルタルのなかにギャップを埋めたり、割れを防いだりするための石をほとんど入れなかった。Sun Temple に集約されているような建築技術の構造は、明らかに、メサ ベルデの、建築家達の技術の素晴らしさに太鼓判を押すものであった。

1190 年代の終わりから 1200 年代にかけて、プエブロ族の先祖達は、メサ ベルデで有名な崖の住居の建設を始めた。彼らが、なぜ、崖の宮殿、あるいは、ロング・ハウスといわれるような巨大なものを作ったのかは、誰も、本当のところを知らない。避難場所のような形の洞穴は、風や、雨、そして、雪などから苦しみを解放してくれ、天候の影響を避けることができる。研究者の中には、こうした崖の住居は、お互い同士、自分を守ったり、あるいは、侵入してくる敵からわが身を守るという防衛的な構造をしていたと信じているものも居る。この崖に建物を作るということの宗教的、もしくは、精神的なよりどころがあつたのかも知れない。いずれの理由にしろ、ある一部の人たちは、Far View のようなメサの台地の上に残ったけれども、ほとんどの人たちは、この崖の住居に移っていった。





セダー・ツリー・タワー

は、プエブロ族の祖先たちがこのタワーとキバとをどうやって繋げていたのかを知る良い例である。多分、キバに繋がるトンネルは、中に居る人たちに危険が近づいていることを知らせることができるようになっていた。考古学者たちは、彼らを脅かしたり、あるいは、それなどとは全く異なる、何か連絡をする必要なものがあったのかどうかは、確証を持っていない。42-43 ページの火事の光景を参照。

メサ ベルデ ナショナル パークにある 5,000 ほどある住居跡のうちの、わずか、600 の住居が、崖に作られて住居である。ほとんどの訪問者達は、崖の住居のほとんどが、スプルース・ツリーの住居や崖の宮殿のように大きなつくりという思い込みでここにやってくる。しかしながら、そのほとんどは全く小さなもので、どれも、せいぜい 20 部屋くらいしかないようなものである。

大きな住居跡には生活の部屋の割に、沢山のキバのあるものがあるが、小さな住居跡には、このキバさえないものもある。住居の前面は、プエブロ族の先祖達が、どんな場所の洞穴でも使えるものは利用していたということを示すように、様々な方角に面していた。そして、中には、その場所には水場を持ったところもあったが、一般的には、水は、近くの泉から汲み上げて来なければならなかった。

考古学者たちが、この崖の住居の前、あるいは、下で、ガラクタやゴミの山を見つけている。壊れた容器、骨、あるいは、石の道具、放棄されたユッカの繊維で作られたサンダル、着古された衣類、火をつかったあとの冷たくなった灰、生活のゴミ、そして、様々な種類のトウモロコシの穂軸、かぼちゃ、そして、そのほかの食べ物のかすなど、沢山のものがこの辺りに投げ込まれていた。考古学の発掘者たちは、プエブロ族の先祖達の日々の生活について、これを再現する情報に基づいて、いろいろなものを並べようという目的から、こうしたゴミの山を調査したのである。こうしたゴミの山こそ、今までなぜに包まれていた様々な問題について、彼らが答えを見つけるヒントになったのである。

プエブロ族の先祖達は、こうした、ゴミ捨て場に死んだ人たちを埋葬していた。こうしたことが、死人に対して畏敬の念の

ないことや尊敬をしていないということを表しているものでは決してなかった；こうして、ものを放り出すということが、特に冬などは凍っていたので、穴を掘って地中に埋めることよりも、簡単に掘ることができたからなのであろう。死んだ人の体は、胸に抱いたような格好にされた膝を、ユッカの繊維で編んだマット、ウサギの毛皮の毛布、あるいは、七面鳥の羽の外衣などでくみ、ある決まった場所に埋葬された。

来世に行っても、役に立つと考えられて、入れ物、道具類などが死んだ人と一緒に埋葬された。宝石、そして、装飾品なども、死んだ人の体の一部として一緒に埋められた。

寂しい冬にここを訪れた人は、雪に縁取りされた洞穴を見ることがある — その光景は、一千もの言葉に値する。スプルー・ツリー・ハウスの朝のツアーに参加した人々は、そこがどれだけ寒く、そして、悲惨なものであったかと言うことに気付くでしょう。プエブロ族の祖先たちが、暖をとるために、服や毛布を着て、七面鳥の羽でできた外衣を身にまとい、火の回りに寄り集まっていたかと言うことが、容易に想像つくでしょう。と同時に、こうした能力のある人たちが、現代の人たちが現実に目の前にしている沢山の囲炉裏とともに、厳しい生活をしていたということもお分かりになるでしょう。

メサ ベルデの放棄

このプエブロ族の祖先たちは、なぜ、わずか100年の短い間に、ここを去ったのであろうか？1200年代の後半には、大変厳しい干ばつがあり、穀物と、収穫の取り崩しがあった。そして、普段、この肥沃な土地が破壊されてしまったのだ。ちょうど、ミニ氷河期のような、寒冷期があり、穀物の育ちの期間が短くなった、プエブロ族の人たちが農業をすることができなくなったのだ。

それに加え、人口のほうは、その後数年のあいだ増加し、ピークに達していた。多分、沢山の人が、自然の収穫物の取り合いをしたのではなかろうか。そして、彼らは、南のほうに行けば、そこには食物が良く成長しているというのを聞き、そちらのほうに移動していったのではなかろうか。

どんな理由であるかは別にして、いずれにせよ、プエブロ族の祖先たちは、25-50年くらいの間にここから、出て行ってしまったのです。それは、決して、大量移動というわけではなく、ゆっくりとした南の地方への動きだったのです。崖の住居に住んでいた以前の壮観さは、時代の荒廃とともにすたれていったのです。そこに残ったのは、プエブロ族の祖先たちの精神だけでした。

最近の建築学的研究

考古学者たちは、最近、この場所で掘ることなしに生活していたプエブロ族の祖先たちのことをもっと学ぶために、幾つかの崖の住居についての建築学的な情報を利用している。この度重なる考察が、彼らの建築学的な知見が、彼らが、どのようにして、一定の考え方の基に生活していたかをより深く理解できるようにしてくれつつ、彼らの社会的な組織に関する沢山の事実を語ってくれると考えている。この明らかにされた記録のなかには、この場所の地図を作ることに加え、建築学的な詳細情報の記録、年輪に刻まれた時間に沿って作られた、壁の並びと結合した一連の住居、家族の単位と部屋の機能を解析、そして、歴史的な反映の記録などが含まれている。

参考資料

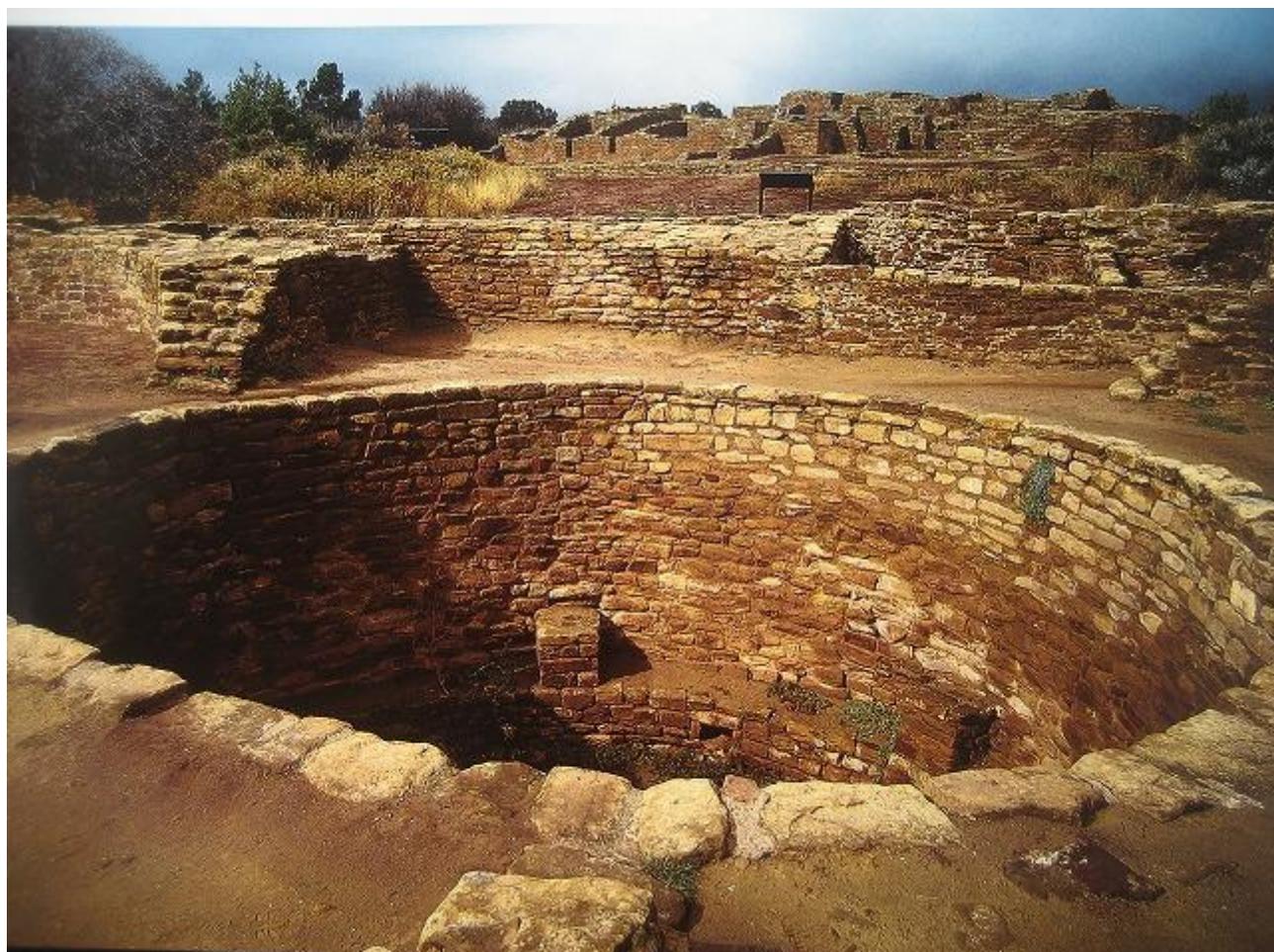
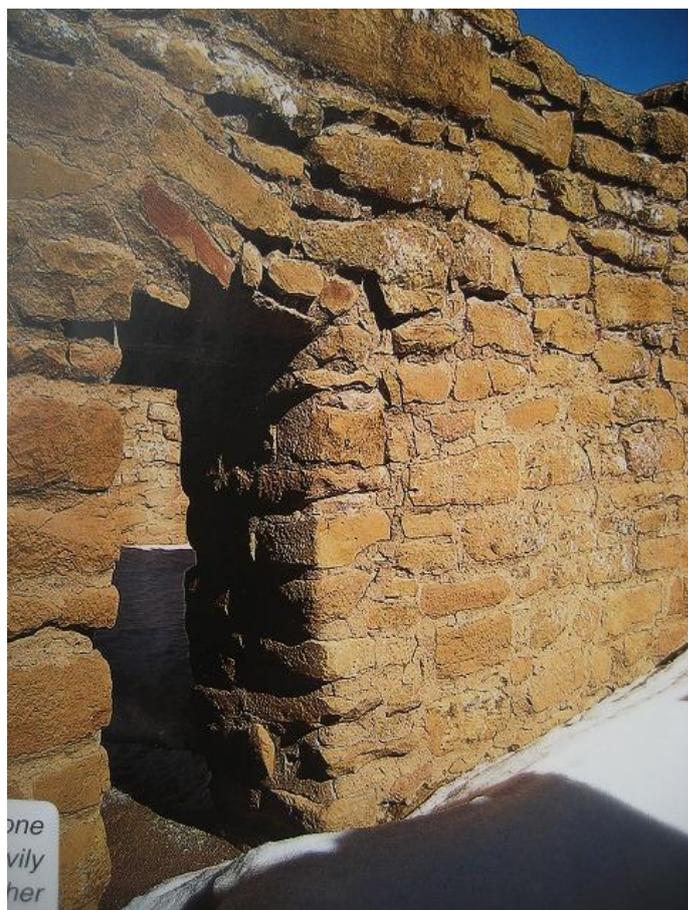
- CORDELL LINDA Ancient Pueblo Peoples. Montreal and Washington, D.C.: St Remy Press and Smithsonian Books, 1994
- FIERO, KATHELEEN. Balcony Huse: A History of a Cliff Dwelling. Mesa Verde, Colorado : Mesa Verde Museum Association, 1977
- NOBLE, DAVID GRANT (ED) . The Mesa Verde World. Santa Fe, New Mexico: The School of Amerian Research Press, 2006

ファー・ビューと太陽神殿

メサ台地の上の住居からなるファー・ビュー地域

は、A.D.900年代からメサベルデから人々が居なくなるまで住居として使われていた。二重に並んだ石づくりの壁には、きちんとした形の石が、泥のモルタルで固められて使われていた。ドアの上の横木は、回りの砂岩の石に組み付けた平たい石か、もしくは、木切れであった。現代見られるこうした壁は、厳しい天候の条件に対しても耐えられるように、厳重な施しが為されている。キバは、ものによっては、崖の住居の中に見られるものより大きく、そして、深いものもある。

沢山のキバや部屋の屋根に使う分の木を切り出すことが、どれだけ大変なことだったのであろうか。プエブロ族の祖先たち彼らの切り出した木を何度も再利用していたことに疑いはない。



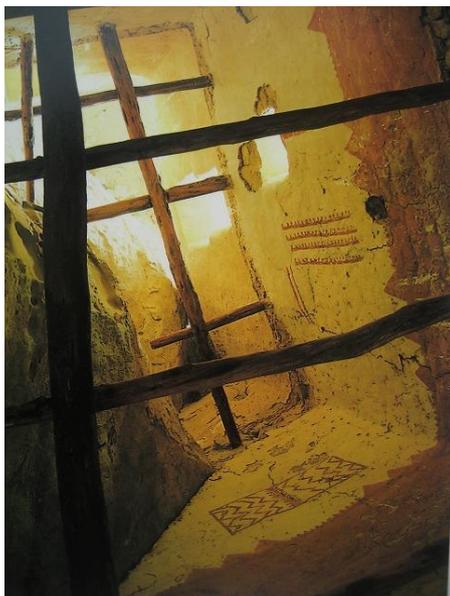
プエブロ族の祖先の 魂だけが残っている



崖宮殿から溪谷を越えたメサ台地の上にある、太陽神殿

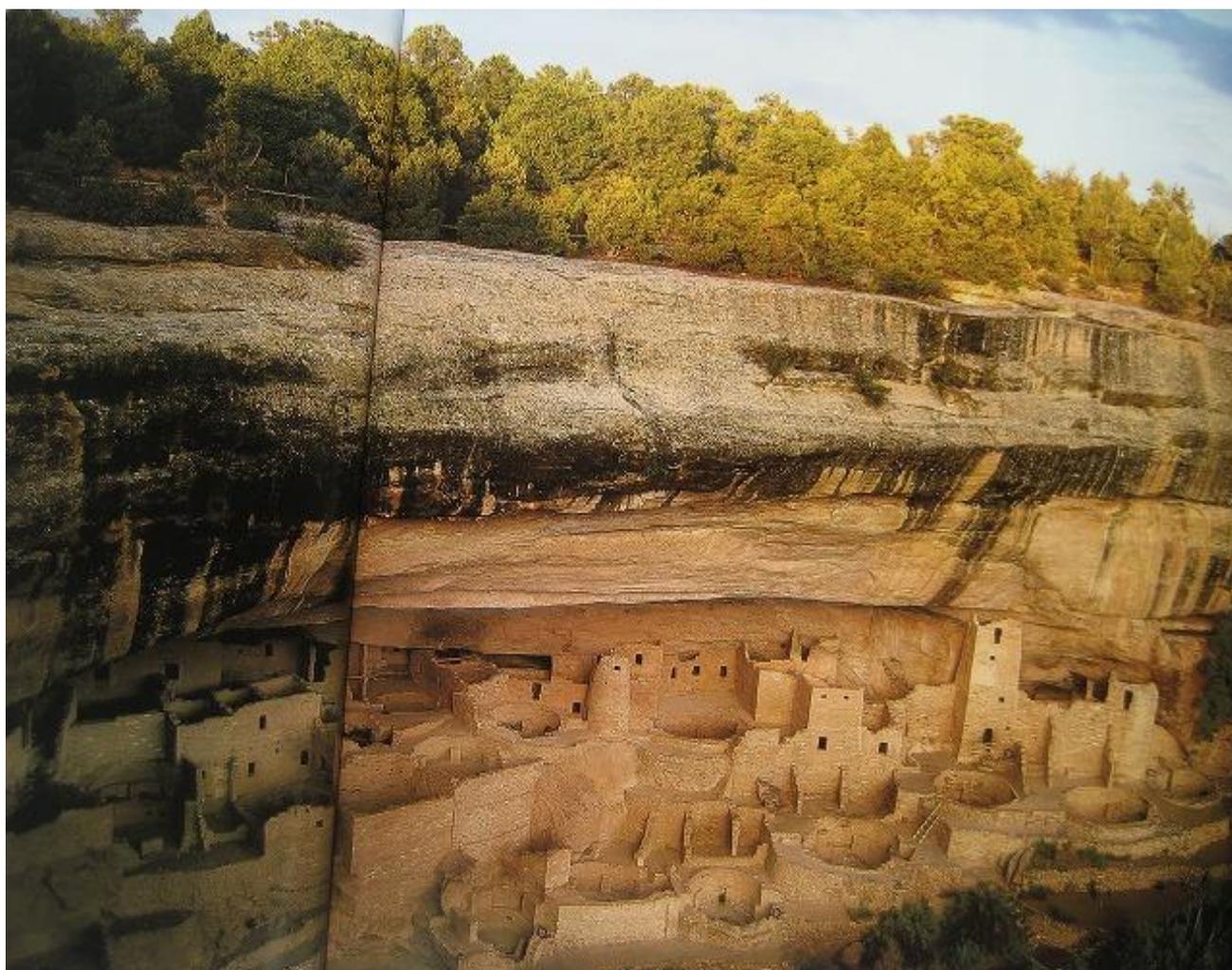
は、1200年代に建てられたものであるが、完成してはいなかった。ここの部屋とかキバの屋根が覆われていたという証拠は何もない。Jesse Walter Fewkesが、1915年にDの字型の住居を発掘しているときには、陶器の破片とか、日用雑貨の工芸品などはほとんど見つけることはできなかった。考古学者たちは、ここは、かなり大きな集団の儀式を執り行う場所ではなかったかと信じている。ここ以外に、メサ台地の上の住居には、部屋同士を繋いでいる長く、狭い、二重構造の壁を見ることはできない。Fewkesは、壁に使われた泥のモルタルが雨や雪で侵食され、崩れるのを防ぐために、その壁の上にコンクリートのキャップをつけた。

崖の宮殿

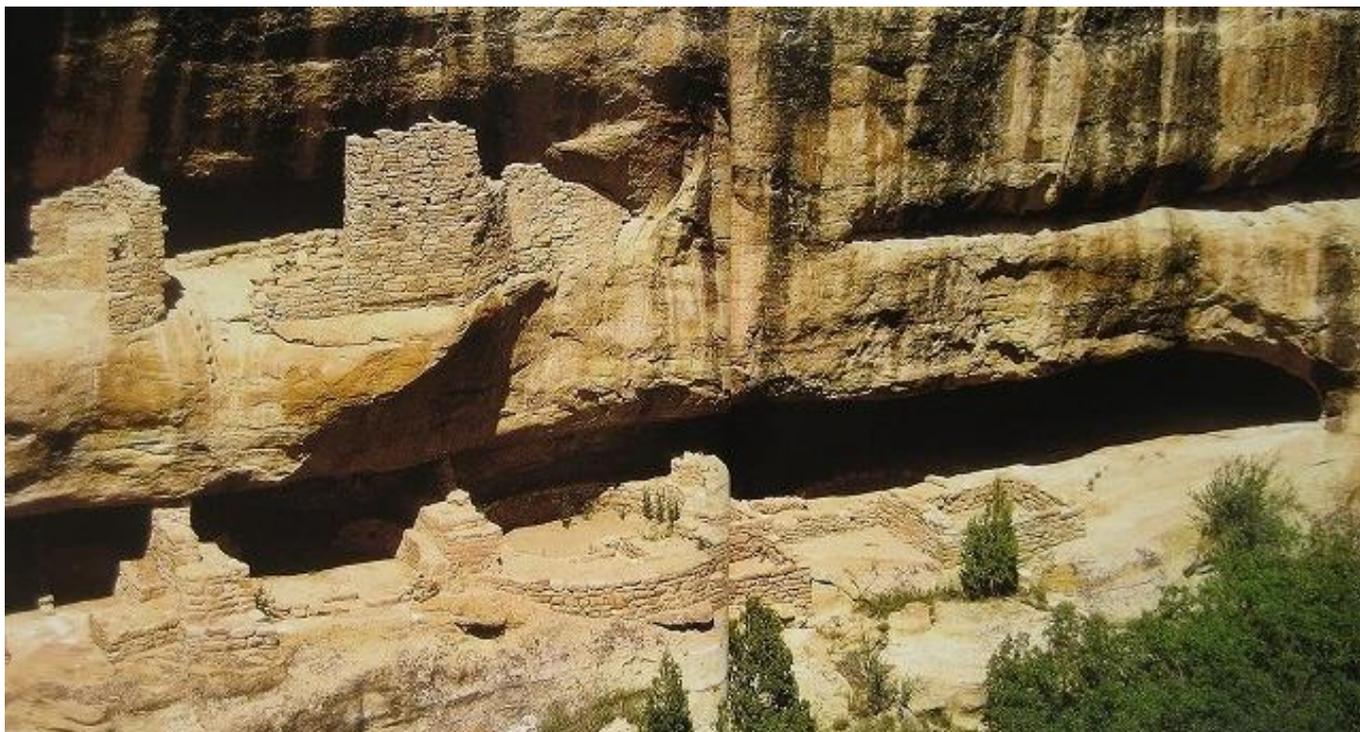


崖の宮殿の四階部分にある壁画

は、非常によく保存されている。多くのプエブロ族の祖先たちは、幾何学な形や紋様を赤茶けた、或いは、灰色がかった白い壁に描いていた。こうしたものが、どのような意味を持っているのかということを説明してくれる記録は一切残っていない。こうした模様の幾つかは、象徴的、もしくは、装飾のためのものではないかと思われる。こうした目的が何であるかは別として、これらは、プエブロ族の祖先たちの芸術的才能を賞賛するものとして十分な働きをしている。



1888年に、この崖の宮殿を最初に発見したカウボーイは、
 どれほどのときめきを覚えたことであろう。この巨大な洞穴に作られた住居には、150もの部屋と、23のキバがある。そして、1200年代には、ここには、100人前後の人たちが住んでいたと考えられている。そんな社会は、どれほどにぎやかなものであったかを想像してみてください！ この住居の前の部分には、建物の安全のための支柱が付けられていて、その一部が今でも傷つかずに残っている。部屋の大きさは、平均して大体6×8フィート程度で、そこには、主に貯蔵庫にしていた小さな部屋がついていた。



火の神殿

Fewkes 溪谷にある火の神殿

ここは、メサ ベルデにある二つ踊りの広場のうちの一つである。この広場の中心には、竈のようなものがあり、その回りは、二つの水場があるが、これは、プエブロ族の先祖達のために、足を洗う桶だったのであろう。儀式が行われている間は、その溪谷には、歌声が絶えることなくこだましていたのであろう。



新しい火の家

Fewkes 溪谷の火の神殿に隣接した場所にある新しい火の家には、20 程の部屋と 3 つのキバがある。この住居がそれほど大きくないのに、キバがこれだけあるのは、珍しいことである。洞穴にずっと近づいてみると、そこには、上の階に上るために、崖に削られた足場の在ることが分かる。上部の岩棚には、今日では、登ることができないように思われるが、プエブロ族の先祖達は、この上部に届くように、二階、三階建ての部屋を作っていた。そこにあがるには、梯子とか、或いは、足場を使っていたのであろう。

だいたい、この崖の住居は一般的には、比較的小さなもので、沢山の人が利用するような大きなものではなく、一家族程度が住めるくらいのものであった。なかには、5 階とか、6 階といった特別のものもあったが、小さな住居には、一対の貯蔵庫と、2 つ、ないし、3 つの寝室、そして、料理をするための竈のある部屋が少なくとも一つついていた。こうした小さな家は、大体、キバがついていなかった。多分、小さな洞穴にすんでいた人たちは、儀式とか宗教的な行事に参加するときには、もっと大きなところに行っていたのであろう。こうした小さなもののほとんどは、すでに発掘しつくされている。そして、それらは、定期的に手入れがされ、さらなる研究のために保存されているのである。

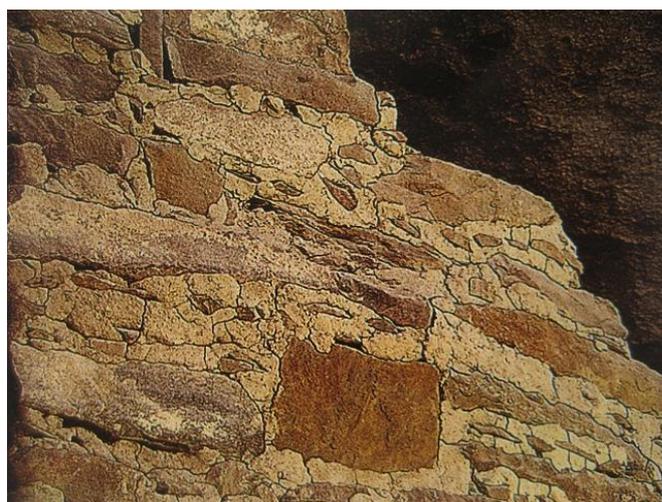
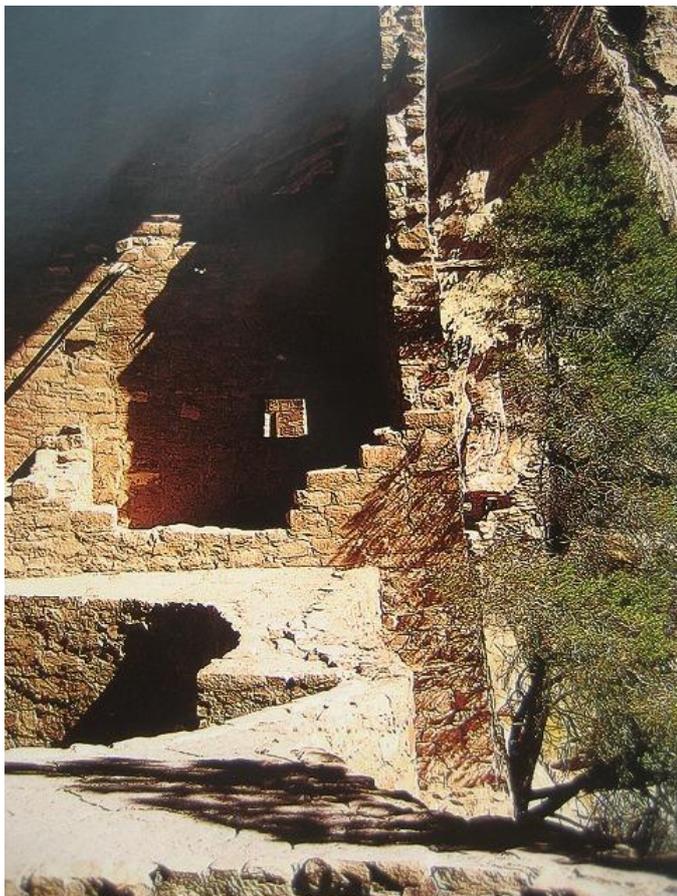
プエブロ族の先祖達は、通常の平地の上の、近くの溪谷にある隣人達を訪問しなければならなかった。この上下する坂道を登りおりすることは、毎日の日課のように行われていた。その過程で、彼らは、野生の植物を収集し、井戸から水を汲み、他の人たちの噂話をし、そして、容器や宝石、そして、彼らの作った工芸品などを交換していた。最も孤立しているような人々でさえ、こんな風にして、共同体の仲間という意識を持っていたに違いない。

バルコニーのある家

もともとは、茶色の石の前壁を持つ家

と呼ばれていたが、現在では、バルコニーのある家となっており、この方がずっとそれらしい。一階の中庭にあるこのバルコニーは非常にいい状態で保存されている。ここから、プエブロ族の祖先たちは働くことができたし、また、ソーダ溪谷を眺め、彼らの子供達を監視したり、すべてのことが一度にできるようになっていた。





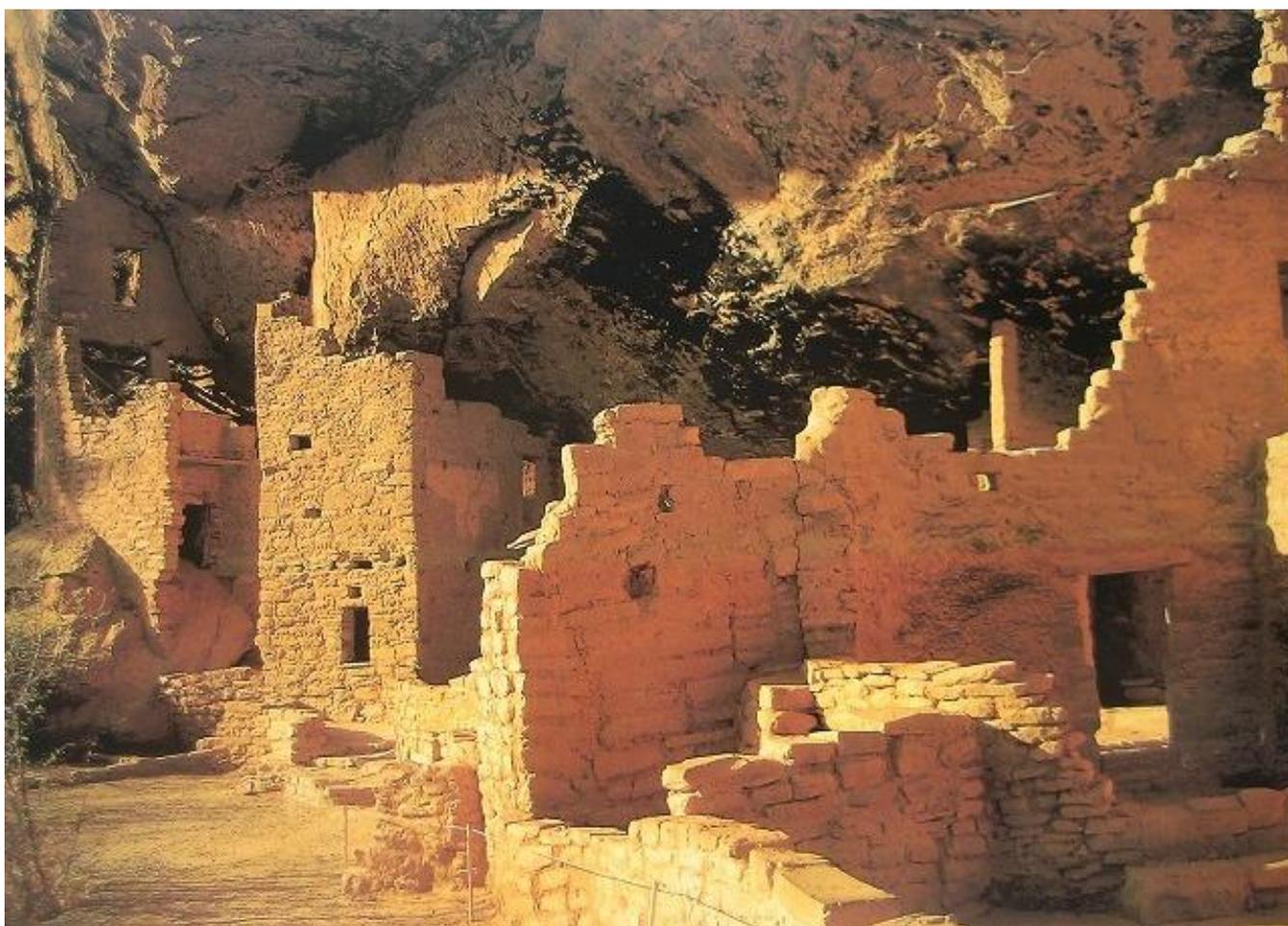
砂岩のブロックの間のモルタルの研究

により、小さな石を泥の中にはめ込み、隙間を埋めていたことが明らかにされた。彼らは、独創的な崖の住居の建設に素晴らしい技術をもっていた。そして、保存技術者たちは、補修が必要なときには、その効果をそっくり真似ていた。最後の仕上げをするときには、プエブロの祖先たちは、石やモルタルの表面に漆喰の上塗りをしていた。

バルコニーのある家についてのすべてのことが、プエブロ族の祖先の謎であった。

キバが屋根つきであるときには、崖の右の端まですんなり行くことができる。そこは、他の住居よりもずっと防備が固くなっているような感じだが、考古学者たちは、そこにどんな問題があったのかは、解明できていない。

プエブロ族の祖先たちは、
春の訪れの最初の兆しを
わくわくとした気持ちで見ている

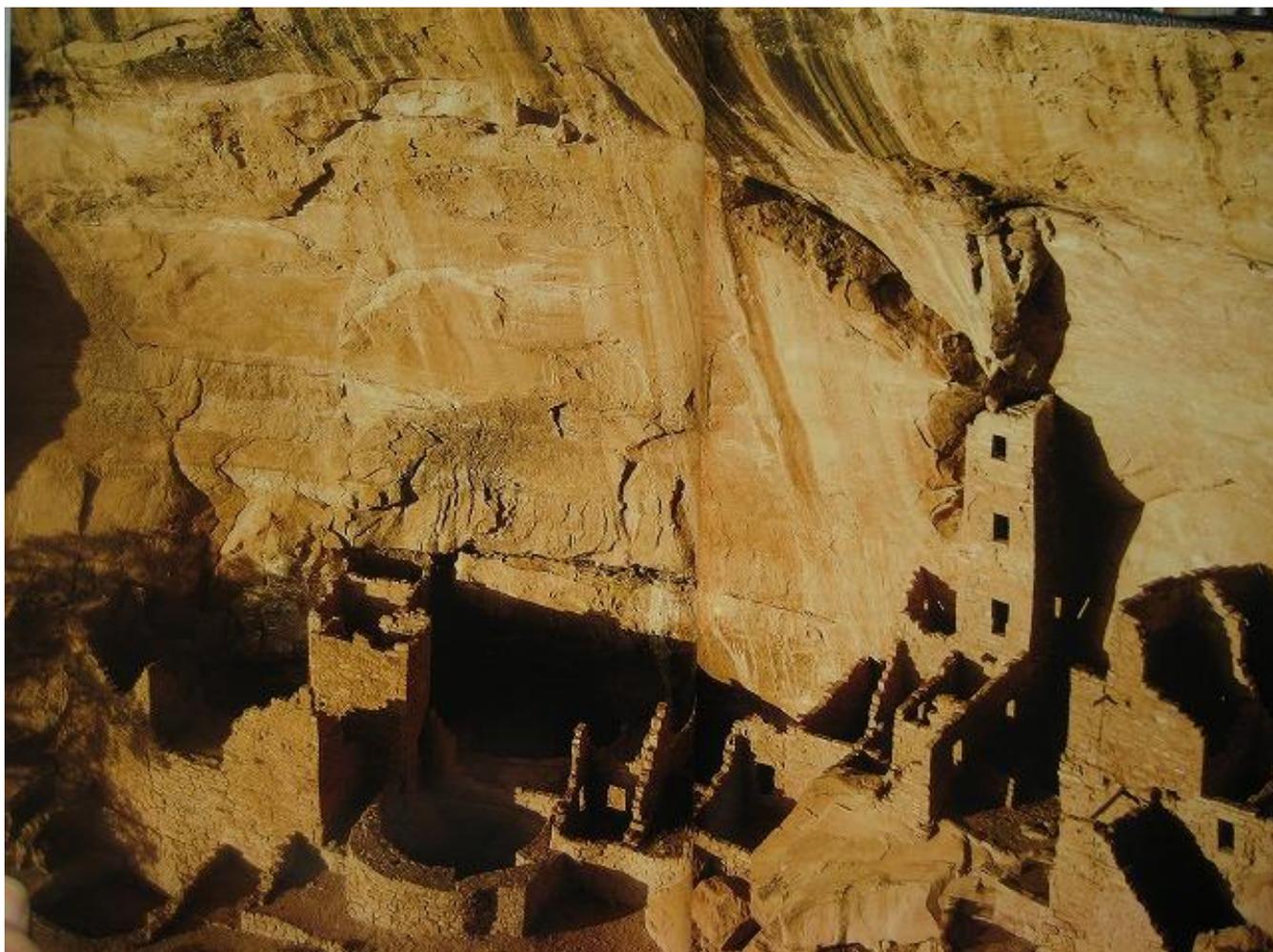


スプルース・ツリー・ハウス

は、この公園のなかでは、三番目に大きな崖の住居であるが、ここには、130もの部屋と8つキバがある。訪問者達は、ほら穴の屋根が真っ黒になっているのに気付くでしょう。そして、それだけ沢山の煙を吸っていた54—90人程度の人たちを取って、それは一帯何だったのだろうと疑問を持つでしょう。プエブロ族の祖先たちが、毎年、春の到来を告げる最初の兆しを見たときには、どれほどわくわくしていたのかは、疑う余地のないところです。

見開きページ

スプルース・ツリー・ハウスは、メサ ベルデの中でも、最も絵に書いたように美しい光景を見せてくれるもののうちの一つである。



ユテ族の人たちは、崖に住居がある
 ということを知っていたが、彼らは、
 “死んだ人の魂が攪乱されると、自分達もまた死ぬことになる”
 と、考えて、そこに、近づこうとさえしなかった。

歴史上のメサ ベルデ



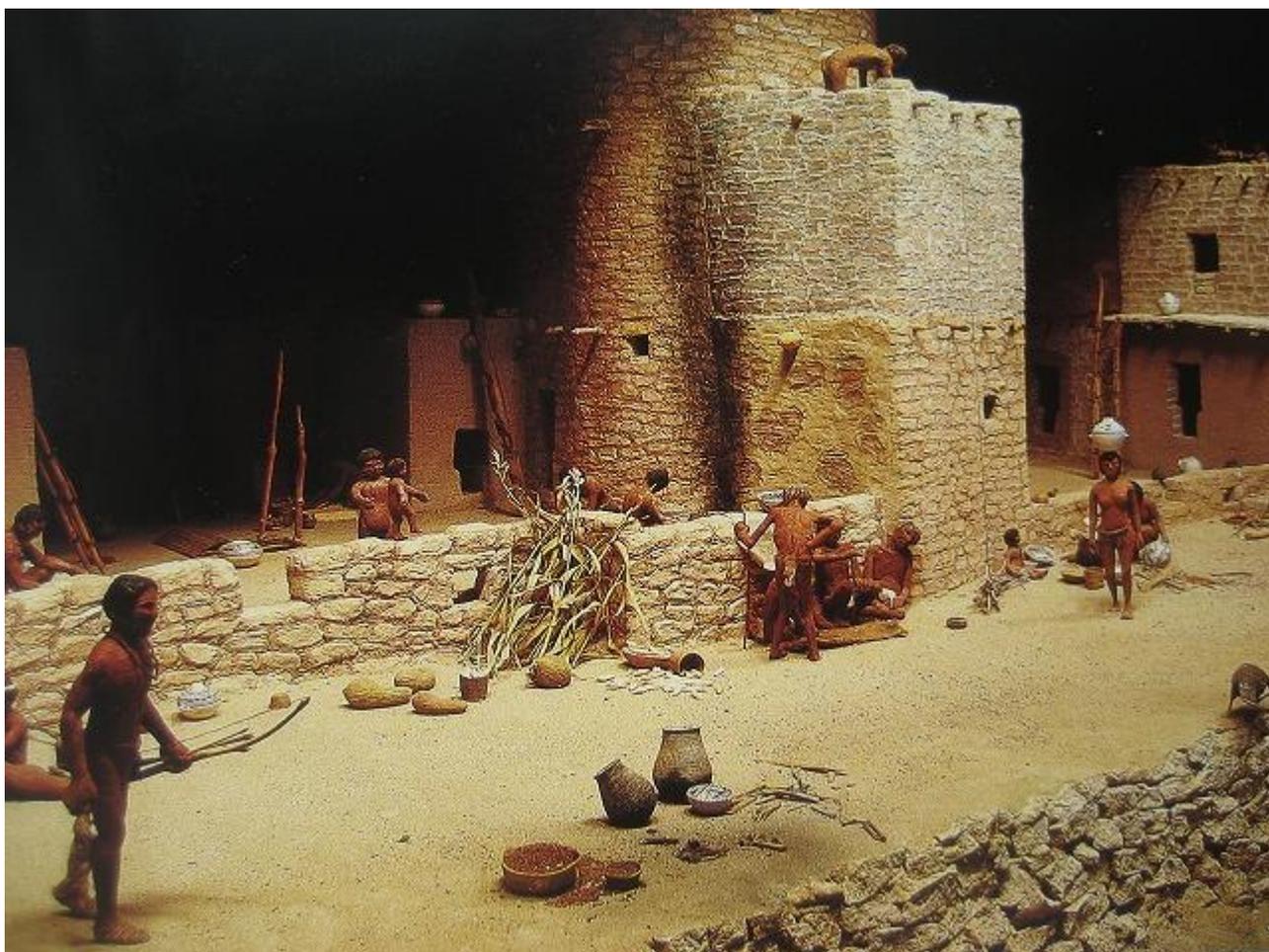
崖の宮殿の中の粉の貯蔵器

大きな集団への食料を供給するには、ここに見られるような、一年を通じて粉を挽いたり、貯蔵しておくような穀物の収穫工場のようなものが必要であった。岩がこうした仕事に適したように削られていた。メサ ベルデは、活気に満ちた場所であったに違いない。

もし、メサ ベルデが、魅力的な有史以前の年表を持っているなら、それは、それと同様に歴史的にも魅了するようなものでもある。実際、このプエブロ族の祖先たちがこの地を後にしてから、他の部族がいつここにやってきたかと言うことは、とてもいい質問でもある。その時期は、実は、1400年代なのである。しかも、これらの人たちの誰も、メサの台地の上には移住しなかったし、また、洞穴のなかにも住みつきはしなかった。ユテ族の人たちは、この崖に住居のあることは知っていたが、しかし、彼らは、“死んだ人の魂が攪乱されると、そのときには、自分達にもまた死ぬことになる”と信じて、ここに近づこうとしなかった。文化の伝統が、彼らが、“古代の文化”をどのように見ているかということに、決定的な役割を果たしていた。

探検時代前期

スペインの記録に、彼らの部隊が、1765年にメサ ベルデの領域を通過したというのが残っている。その後、1776年に、有名な、Dominguez-Escalante 探検隊が、この公園の北の部分を探検し、そのときに、コロラドのドローレの近くにしばらくキャンプを張っていた。その探検の路に沿ったどこかに、スペイン人たちは、“緑の台地”と言う意味の言葉である、メサ ベルデ地域という名前をつけていた。今日、この公園を訪れる人達は、ここにきて、



見上げると、かなり平らな、青々と茂った緑の台地があることに気付くでしょう。

次の100年の間に、メサ・ベルデは、基本的には、全く歴史から忘れられていた。住居に関する孤立した言及が出てきて、そして、沢山の畏獵師や、鉱山夫、探検家達が、幾つかの溪谷に迷い込んでいった。たとえば、崖の住居に関しては、名前と、1861年という日付が付けられていた。しかし、こうした人々は、崖の住居を確認してはいたが、彼らの興味はもっぱら、鉱石による富だけであった。そうした状態は、1874年にマルコス溪谷に入り、そして、崖の住居、二階建ての家、の最初の写真を撮った辺境地写真家 William Henry Jackson が、この地域を紹介する本を発行し、話題になり騒がしくなるまで、残っていたのだ。

崖の住居の発見

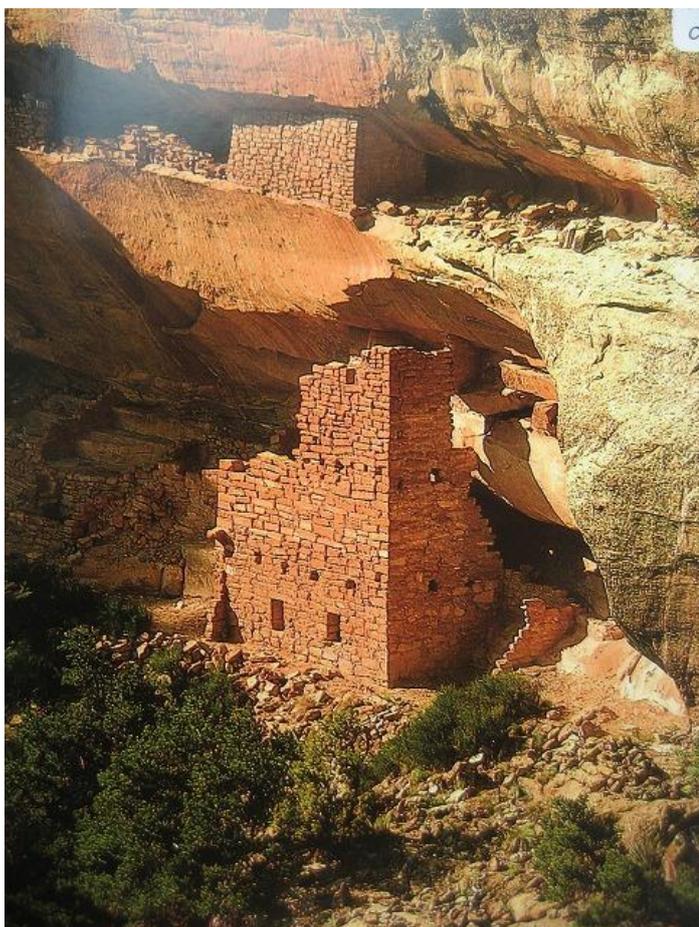
1880年に、休むことを知らない Benjamin Wetherill が、彼の妻と、五人の息子達、そして、1人の娘たちと共に、コロラドのマンコスに、アラモ牧場を開設するためにやってきた。この家族は、ユテ族と非常に懇意にし、冬の間は、マンコス溪谷で彼らの牛を育てていた。そして、彼らは、ユテ族の友人から、崖に家が建てられているという話を聞いた。そこで彼らは、自分達の暇なときに、カウボーイ達は、迷子になった牛を探しに、そして、そこになにか興味あるものがないかと、この溪谷の中に入り込ん

訪問者たちにとってチャピン メサ博物館の最大の目玉は、

有史以前のメサ・ベルデの五つの時代を描写した立体模型を見ることである。それぞれの立体模型は、工芸技術の完成度を別々の見方で注目して作られたものである。ブルース・ツリー・ハウスの立体模型は、AD1100から1300年にかけての旧プエブロ族の時代を表現している。訪問者達は、とりわけこの立体模型の歴史に興味を示している。— こうしたものがどうやって作られたのか、そして、だれがこうした建てものの中に住んでいたのか。どの建物も、あまりにも、綿密に作られているので、それらが、まるで機械で作られたもののように思われてくる。これらは、1930年の半ばから、1940年代の前半に作られたものであるが、ほとんどは、その当時、この公園にあった、市民保存協会(Civilian Conservation Corps CCC)に所属していたメンバーの助けを借りて、この公園の従業員達により再現されたものである。(このプロジェクトは、CCCを含め、この公園の、沢山のプロジェクトの一つとして実行されたものである。)

でいった。1888年の12月の、ある運命を決定する日、Richard Wetherill と彼の従兄弟の Charlie Mason は、後に崖の宮殿と呼ばれるようになった、スプルース・ツリー・ハウスとスクウェア・タワー・ハウスにやって来たのだ。歴史的な考察の結果、他の人たちがそれ以前のその場所に入って来てはいたが、しかし、Wetherill 一族は、そのことを世に広めるために、たちどころに興味を抱いたのだ。

時間が経つに従い、Wetherills の家族は、その崖の住居からの遺品の収集と、これを見学に来る旅行者の案内で、時間に追われるようになった。こうして、アラモ牧場は、たちまち、旅行者達の突出した目的地となったのだ。そこで、Benjamin Wetherill は、スミソニアン協会に、彼らがもし、この工芸品の収集物を購入する気があるなら、これを見に来るようにと手紙を書き、この場所を探検するときのガイドとして申し入れをした。残念なことに、スミソニアンは、そのときに十分な資金がなかったため、この機会を逸してしまったのだ。一方、Wetherill は、さらに話を進めるために、あちこちで展示会をしようと、こうした工芸品を整理した。



1891年に Gustaf Nordenskiöld がメサの遺産を研究したとき、

彼は、自分の撮影器具を、彼が Wetherill Mesa と呼んでいたところにある住居の中にしまったおいた。この住居、コダック・ハウスは、発掘されずに残っており、遠くから見るだけである。そこには、70 或いは、それ以上の部屋が、二つの階に分かれて作られており、西にあるロック溪谷に面している。人は、Nordenskiöld が、彼の撮った写真が、この場所の記録と、この地域を公に知らせるものとしてどれだけ重要なものになるかということを知っていたかどうか疑問をもつだろう。

1892年に、

Virginia Donaghe Mc Clurg が

メサ ベルデ ナショナル パークを

作るなかで、

たった一人の女性楽隊車となった。

崖の住居の噂がたちまち広まっていった。そして、1891年の6月に、スウェーデンの Gustaf Nordenskiöld という名の旅行者が、それを個人的に見たいと決断した。彼は、科学的な背景を持っており、また、古代の遺跡にとっても興味をもっていた。彼は、最初にこの住居の発掘作業をしたばかりでなく、この地域に関する最初の本、メサ ベルデの崖の住人達、を出版したのだ。Nordenskiöld は、彼がコロラドを離れるときには、自分が発見した工芸品の収集物をスウェーデンに送り出して、一部、不評をかった。彼の遺産は、彼が取った写真と彼が推進した研究に残されている。

ナショナル パークの建設



クリフキャニオンからのこの眺望は、フュークスキャニオンがクリフキャニオンに入っているところにある太陽の神殿から取られたものです。この周辺で、ここの公園の中のごにもある崖の住居の中でももっとも充実したものを見ることができます。ここにカウボーイ達が来たときに、どれほど信じられないような様々なことが、彼らの目に留まったことでしょう。**Fewkes** は、1915年から1920年にかけて、あちこちを発掘し、そして、その小さな溪谷に、彼の名前を残しました。

“ニューヨークグラフィック”の特派員である Virginia Donaghe McClurg が 1892 年にメサ ベルデを訪問した。彼女は、この崖のできた住居を保存し、そして、これをナショナル パークにするためにたった一人の女性の楽隊車となったのだ。彼女の宣伝的な努力が Colorado Federation of Women's Clubs の支持に刺激となると、強力な議会に対する陳情活動が始まった。1900 年までに、彼女は、Colorado Cliff Dwellings Association と協力関係を確立し、彼女自身は、そこの理事となった。Lucy Peabody、彼女は非常に経験豊かなワシントンの名士であった、が、この問題の重要性に注目した。この崖の住居は、ユテ族の居住保護地区にあったので、こうした女性達は、ユテ族とともにその土地の合意書作りに時間を割いた。

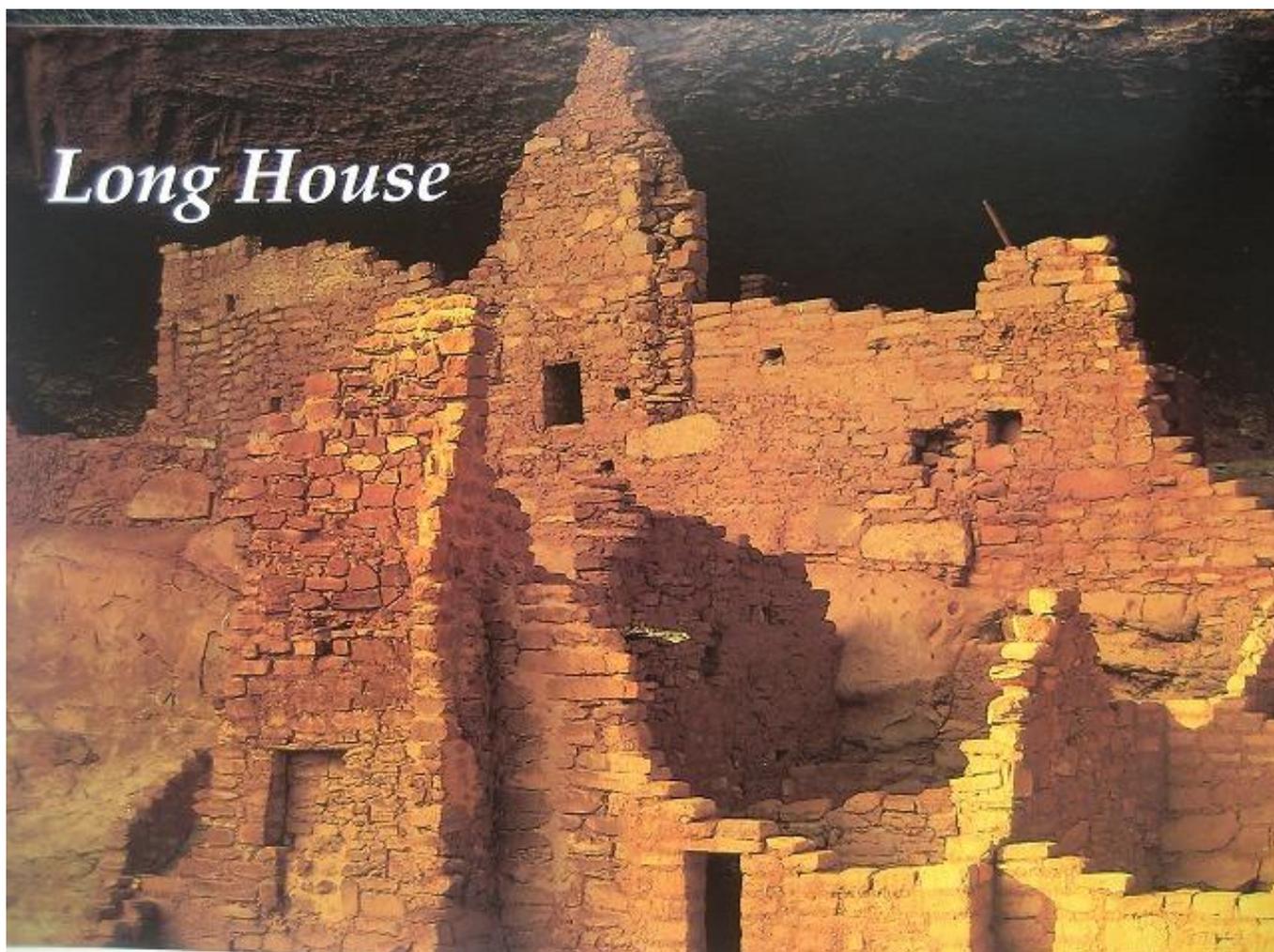
ビクトリア王朝時代の女性は、国家の政治の先頭に立っていたわけではないが、しかし、彼女達の努力の結果、議会を通過した、メサ ベルデのナショナル パーク建設の予算に、ゼオドール・ルーズベルト大統領が、サインをした。1906 年の 6 月 29 日のことであった。

保存が優先する

この公園に通ずる適当な道路はなかったが、最初の 2・3 年の間は崖の住居の保存事業が優先されて実施された。スミソニアン協会で働いていた Jese Walter Fewkes が、1909 年のスプルス・ツリー・ハウスを手始めに、メサ ベルデにある 16 箇所の地点を次々に発掘していった。そして、1909 年の夏に、Fewkes は、崖の宮殿を発掘し、これの整備を実行した。この後も、彼は、Far View や太陽の神殿なども手がけた。この仕事の過程で、Fewkes は、このナショナル パーク サービスのなかでは、最初となるキャンプファイアーも実施した。

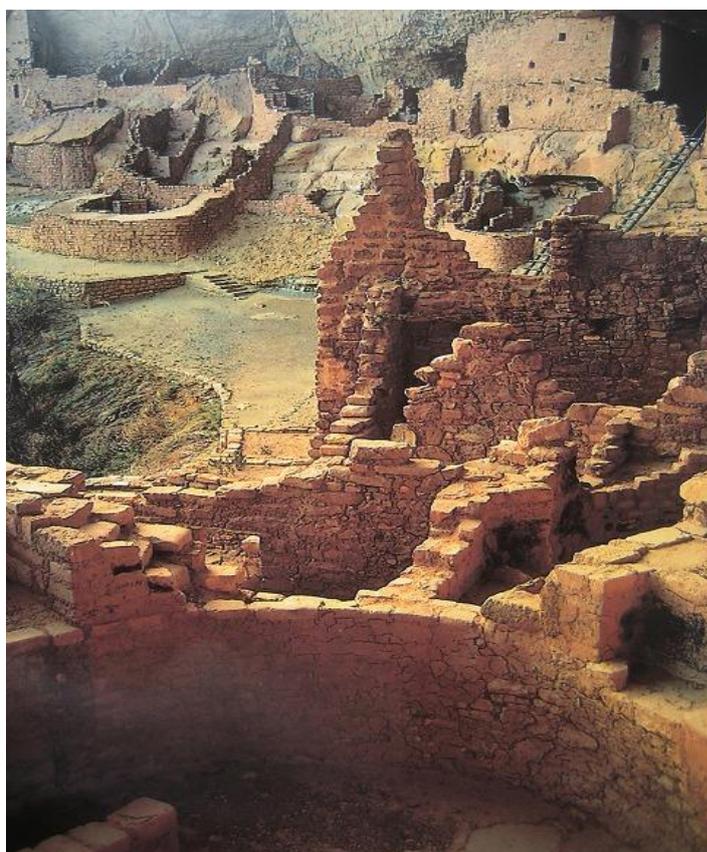
おそらく、このメサ ベルデのナショナル パークの歴史の中で最も影響力の強い人物は、Jesse Nusbaum であろう。彼が最初にこのナショナル パークに来たのは、1907 年に研究のためと、写真を撮るために来たときである。1910 年に彼は、バルコニーハウスを発掘し、その保存をした。1921 年から 1931 年にかけて、彼は、指導監督者として、ここを効果的に管理された公園とするために、大奮闘の運営を取り入れた。それこそ、チャピン メサ博物館とその他の管理事務所の建築スタイルになった Nusbaum のデザインであった。彼は、この廃墟の遺産のガイド付きツアーを企画するなど、最初の解説プログラムを確立した。

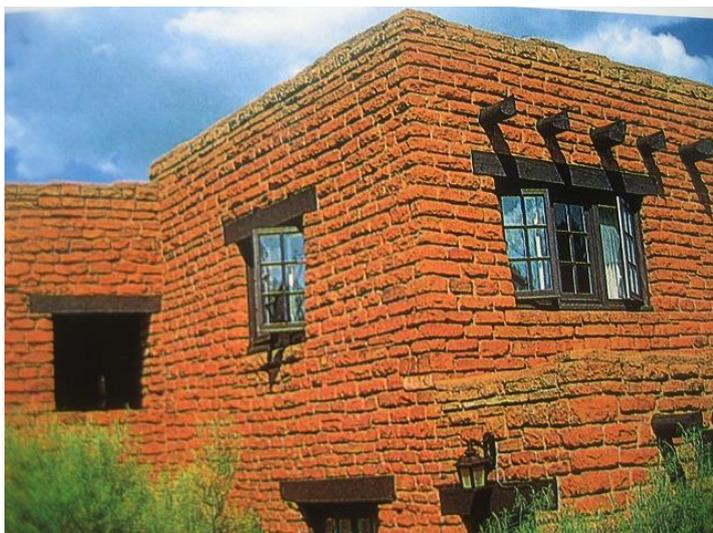
1913 年に、初めて荷車の通れる道路が、マンコスからブルース・ツリー・ハウスまで開通した。そして、1914 年には、この



メサ ベルデの崖の住居の中でも二 番目に大きなロング・ハウス

は、1958年から1963年にかけて実施された **Wetherill Mesa Archeological Project** の一部として発掘されたものです。この長い洞穴には、このパークでも、最も活発な湧き水が存在していました。湿気を十分に蓄えた苔が、この後ろの部分を覆っていたのです。ここを訪れた人たちは、水をくみ上げるために使われていた空洞の深い穴を見ることができます。この洞穴には、150—175人くらいの人たちが、150の部屋と21のキバを建てて生活をしていました。彼らは、そのほかには、チャピン メサにある太陽の神殿に似たような、非常に大きなキバと、踊りの場を築いていました。住居が南のほうに面していたので、冬の期間でも彼らは、十分な太陽の光の恩恵にあずかっていました。こうした、素晴らしい自然の条件が、プエブロ族の祖先たちには、きわめて重要だったに違いありません。





ナショナル パーク サービスの管理事務所

これは、ここの歴史ある場所に1920年代から、1930年代の前半にかけて建てられた、幾つか建物のうちの一つです。それぞれの建物には、崖の住居をモチーフにした建築学的なデザインが取り入れられています。

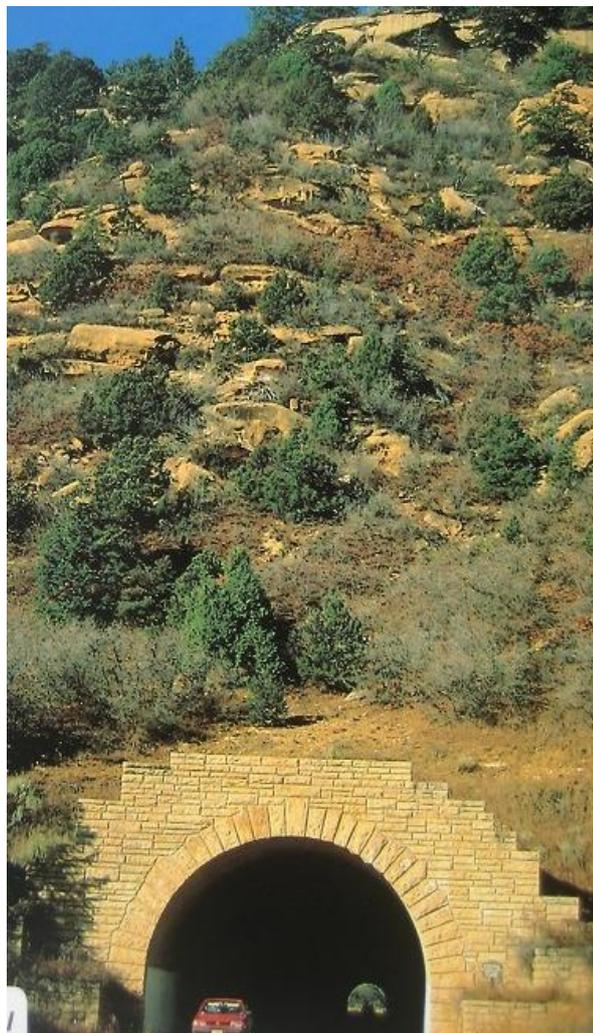
新しい道路を通して初めて車がやってきた。このことは、非常に沢山の人たちがこのパークに来る大事な突破口となった。今も、“ナイフの刃のような切り立った場所”と呼ばれているある場所についての話が残っているが、それは、あまりにも、鋭く、そして、危険な場所で、1957年には、トンネルが完成し、チャピン メサに短時間で安全に行くことができるようになり、この路は、ついに閉鎖された。

メサ ベルデに来て、市民保護団体 Civilian Conservation Corps のよって為された仕事の実例を見ないで帰る人は1人も居ないでしょう。1934年には、沢山の CCC のキャンプが、このパークのあちこちに設営されました。ここに登録された人々は、水の流れる場所からチャピン メサ博物館の復元模型のあるところまでの路のあらゆる整備をしました。彼らのこうした労苦がなければ、今日のパークは存在しなかったでしょう。

夢のある科学的研究

1958年から1963年にかけて、ナショナル パーク サービスは、ナショナル地理学会との共同で、今日まで至る、このメサ ベルデの素晴らしい夢のある科学的研究を開始しました。これは、Wetherill Mesa Archaeological Project と呼ばれるもので、メサの頂上台地と崖の住居を、他の学術的な研究を推進するのと同じように、調査し、発掘し、そして、それを保存するという試みでした。このプロジェクトのおかげで、ロング・ハウスやステップハウスが、一般大衆にも公開されるようになったのです。考古学的な研究だけでも、1百万ドル以上の経費がかかったのです — この金額は、その当時としては途方もない金額だったのです！

メサ ベルデの歴史からすれば、これらは、ほんのわずかの重要な出来事に過ぎないのです。考古学的な研究は、今でも続けられていますし、この場所を素晴らしい状態に修復し、保存するという努力は、今も継続されているプロジェクトなのです。今日に至るまで、メサ ベルデは、築いた



1957年に、パークサービスのメンバーが建設したトンネル

このトンネルは、モアフィールド・キャニオンからプラター・キャニオンに抜けることができ、このおかげで、これまで、維持することがとても危険であったこのパークへの入口の部分で、効果的に回避することができるようになったのです。

人々への賞賛のしるしとして、その人たちの仕事を保護するために、大事に管理されている、唯一のナショナル パークなのです。

参考文献

Multiple Authors, The Mesa Verde Centennial Series.

Durango, Colorado: The Durango Herald Small Press, 2005, 2006

Smith, Duane A. Mesa Verde National Park: Shadows of the Centuries. Lawrence, Kansas:

University Press of Kansas, 1988

Smith, Jack E. Mesas, Cliffs, and Canyons. Mesa Verde Museum Association, Inc., 1987.



メサの頂上台地の 16 番地にある、AD1075 年ごろ建てられた、キバ

他の沢山のキバより、直径が大きく、そして、通常は、6本なのですが、ここには、8本の片蓋柱、もしくは、屋根の支柱があります。どこのキバも同じですが、吸気システムが非常にうまくできています。火を起こしたときには、新鮮な空気がキバを取り巻いているこの吸気孔から入ってきて、（横壁に付けられている穴）、煙は、屋根の真ん中にあいている穴から外にできるようになっています。



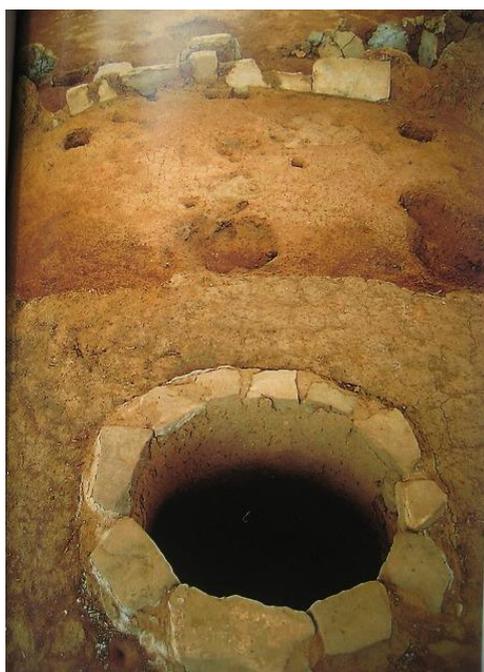
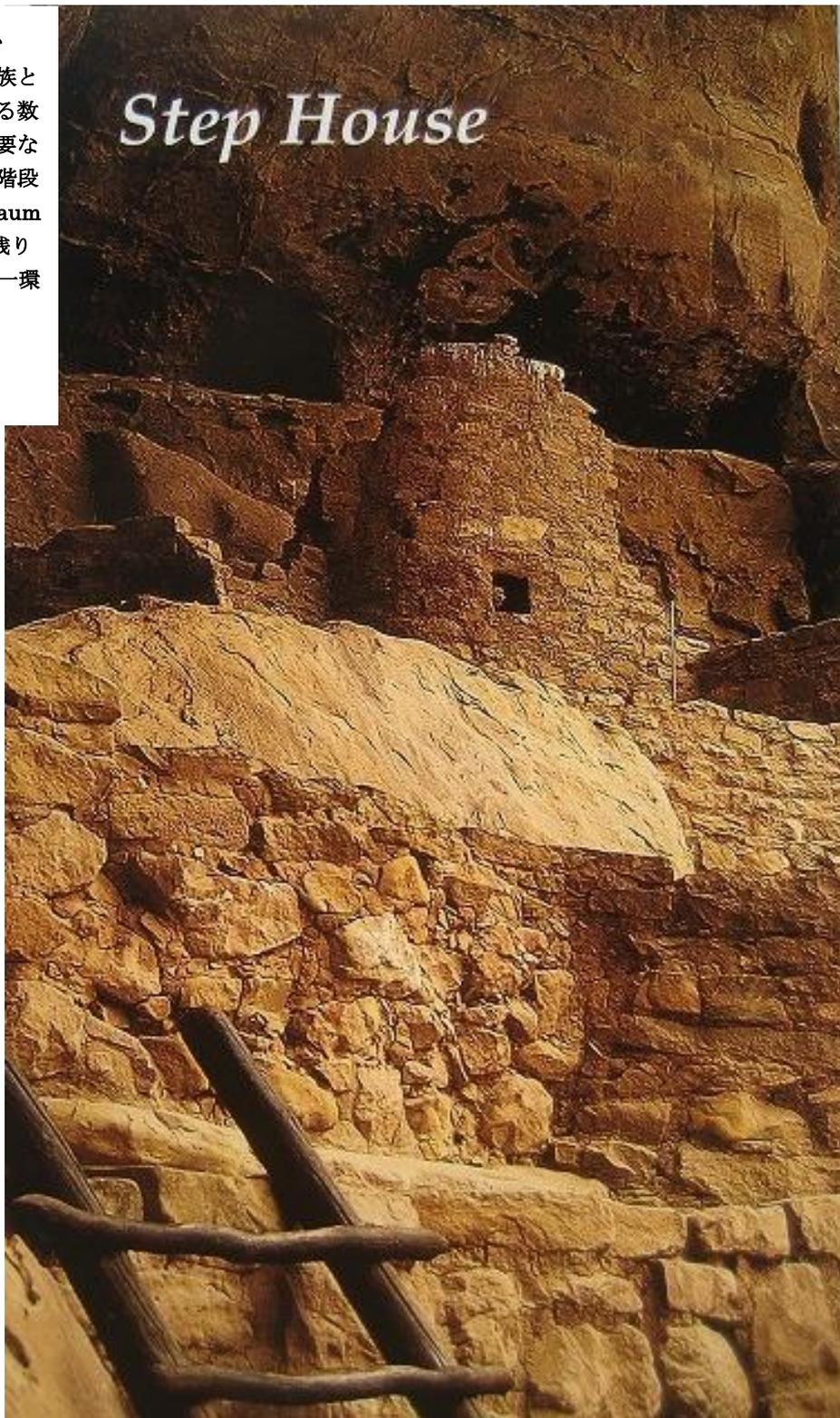
地下室への入口

地下室に入るには、屋根のある開口口から、或いは、次の間 — 地下室の隣に作られた小さな控えの間、から入るようになっています。この写真に見られる、竈のどちらかの側から突き出ている石の板は、そでの壁と呼ばれているもので、これで、料理する場所と他の部分と区別していたのです。

Etherill Mesa のステップハウス

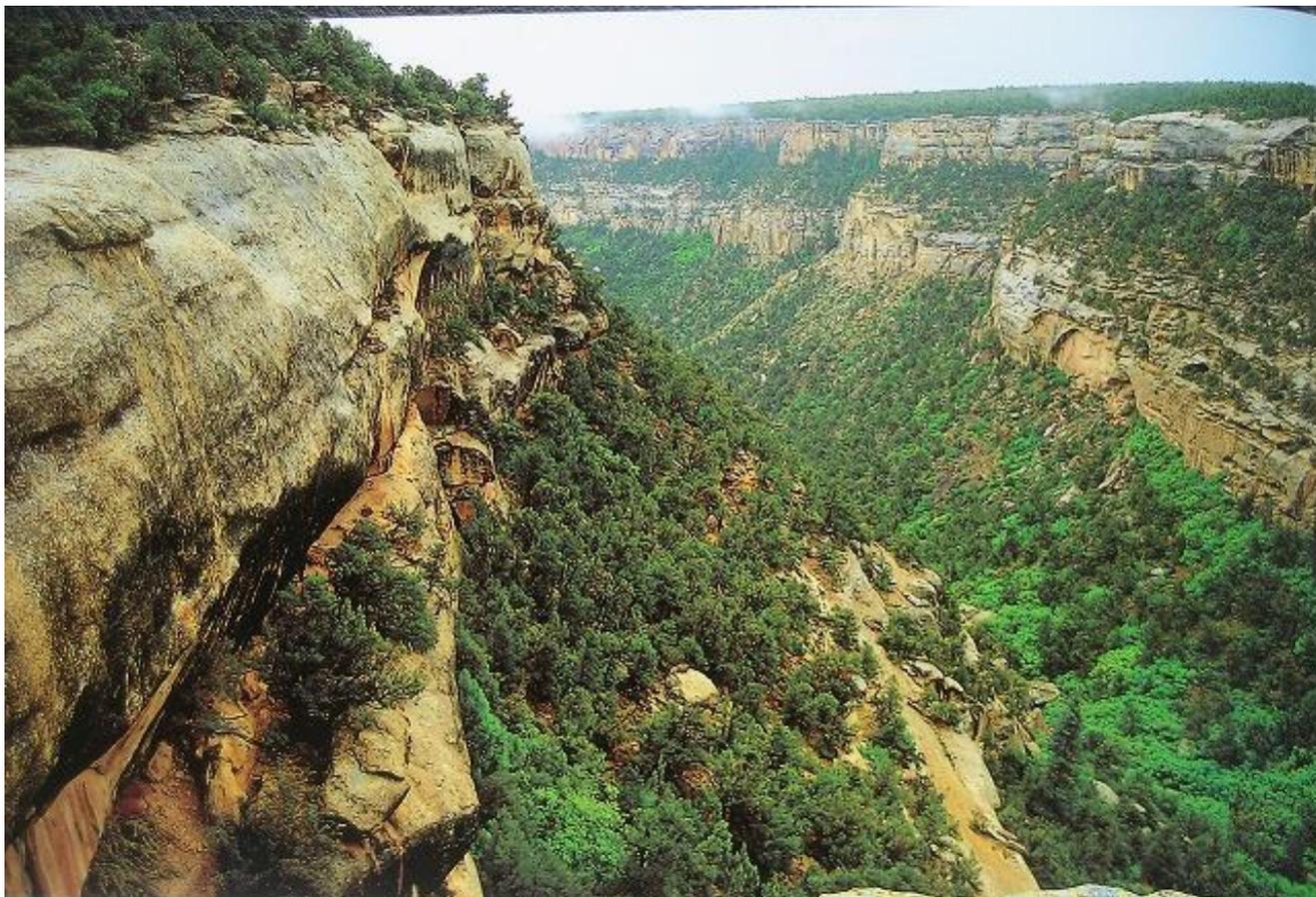
ここは、訪問者達が、箆網技術を持った部族と
 プエブロ族の両方の遺産を見ることができる数
 少ない崖の住居の一つですから、非常に重要な
 ものです。メサの頂上に繋がる有史以前の階段
 が、住居という名前をつけたのです。Nusbaum
 が 1926 年のその一部を発掘しましたが、残り
 の部分は、Wetherill Mesa プロジェクトの一環
 で発掘されました。

Step House



ここには、二つの竪穴式の住居が見られます

小さな竈は、A.D.674年に作られた古いものと、前の部分が重なっています。これは、後に作られたメサベルデの竪穴式の住居が、より深く掘られていたその特徴なのです。ここには、二つの竈と、天井を支えている柱に囲まれた、深い穴が在ることにお気づきでしょう。



ほとんどのメサ ベルデキャニオン

は、百万年前に水の浸食によって形作られました。溪谷は、ちょうど指のように、マンコス川に向かい、北/南の方角に走っています。クリフキャニオンは、崖の住居が上部の砂岩の層に発見されている分岐キャニオンの典型的なものです。溪谷の底の生い茂った草木は、歩くのが困難なのですが、ここに住む動物たちにとっては、絶好の場所なのです。プエブロ族の人たちは、この環境の中でどうやって生きていくのが一番良い方法なのかとすることを良く知っていたのです。



これは決して異常なことではないのです

泥板岩の傾斜が、メサ ベルデに入る路の途中にずれ落ちているところです。とりわけ、春になると、氷結とそれが融けて、こうしたことが良く見られます。この写真のようながけ崩れにより、1979年には、しっかりした補強で、安全に通行が回復するまで、この公園に入る道路は長い間閉鎖されていました。

地質学的な力

モンテヅマ溪谷展望台から良く使われている有名なナイフエッジ道全体の眺望を楽しむことができます。この道は、泥板岩が滑り落ち始めるといろいろな問題が発生する崖の端にそって走っています。突然に、砂岩の大きな塊が道路に覆いかぶさってきたこともあります。もし、旅行者が、今、この道が怖いのであったとしても、— それは、過去に起きた悪夢ではないのです。



公園への入口

に向かう途中で、まず目に入るのは、この溪谷の上に悠然と聳え立つ、砂岩が天頂を覆う泥板岩の、ポイント ルックアウトである。公園の入口の標高(6,900 フィート)は、崖の住居のあるところとほぼ同じである。ここに行くには、パーク・ポイントのある、8,500 フィートまで上がり、それから、もう一度、7,000 フィートまで下ることになるのだ。

野生の草花が咲き乱れる、5月、もしくは、6月に
 ここに来た幸運な見学者は
 こうした花の飾りつけで、あたかも生き返った
 かのように見えるメサ ベルデ全体に繰り広げられる、
 赤、青、黄色、そして、白い鮮やかな彩りの世界を
 楽しむことができます。

豊かな自然の保護

メサ ベルデは、年間の平均降雨量が約 18 インチの ー乾燥農地としては十分な雨のある、準乾燥地域です。夏には、気温が、90° 半ば(F)まであがるが、冬には、稀に零度以下まで下ることがある。霜のない植物の成長期間が 150 日程度あり、標高が、7,000 から 8,000 フィートのメサの頂上台地では、様々な植物、そして、動物達にとって独特な適合地帯であると同時に、農耕民にとっても素晴らしい環境を提供してくれている。

生息環境共同体

最近発生した自然火災が、かなりはっきりと光景を変えてしまったが、何時もは、このパークの北部の高地は、山岳の灌木地帯になっている。ここには、ガンベル・オーク、サービスベリー、マウンテン・マホガニー、そして、クリフ・フェンドラープッシュなどが、様々な草木とともに点在している。一方、北の断崖にある影になった分岐した溪谷には、ダグラスのモミの木の下木が寄り添うように茂っている。

ピニオン、ビャクシンの森が、メサの頂上台地と、このパーク全体の溪谷の斜面を多い尽くしている。プエブロ族の先祖達は、建築用の資材や薪としてこうした木々を利用していた。

メサの頂上台地と崖の宮殿/バルコニーハウスの周回道路から、見学者達は、異様な感じを与える木の全く生えていない深い谷

底を見ることができた。こうした、谷の底の灰色がかった緑色というのは、ヤマモモギ、シロサルビア、ソールトブッシュ、トマチロ、さらには、ヒラウチワサボテンなどの草木が繁茂していることを表している。こうしたあらゆる植物の成長が、このパークをして、“メサ ベルデ”と名付けるにふさわしいものとしているのである。

動植物

野生の草花が咲き乱れる、5月、もしくは、6月に、ここに来た幸運な見学者は、こうした花の飾りつけで、あたかも生き返ったかのように見えるメサ ベルデ全体に繰り広げられる、赤、青、黄色、そして、白い鮮やかな彩りの世界を楽しむことができます。



8月の後半から、10月の前半にここを訪れる見学者は、誰でも道路の脇の、黄金色に満開となったラビッドブラッシュの林冠を見ることができます。

この公園に見られる
動物や植物の
種類の多さには、
ただ驚くばかりです。



およそ、1,500頭ほどのミュールディアが、この公園には生息していると生物学者達は見えています。彼らの好みの食料は、管理事務所がある辺りに沢山生えているアンテロープ・ビッターブラシと言う植物です。厳しい冬の間は、鹿たちは、周りの谷の標高の低いところに移動しています。

道路わきでは、ぶらぶらと歩いているコヨーテを良く見かけます

コヨーテは、ネズミやウサギを獲物にしているのです。彼らは、車が来ると、一目散にピニオンやビャクシンの森の中に逃げ込んでしまいます。そして、車が通り過ぎると、再び、飛び出してきて、彼らの獲物を探し続けています。



メサ ベルデ地域は、非常に様々な動物達の生息地域になっていますが、中でも、ミュールディアが最もよく見られる動物です。彼らは、何時も、モアフィールドキャンプ場やファー・ビュー ロッジの辺りで、草を食べていますので、見学者は誰でも、彼らを間近に見ることができます。また、ここには、小さな群れですが、エルクがおりますし、時には、ブラックベアーも、観測目的の見学者達の前に姿を現し、喜ばせてくれます。出会う機会は少ないのですが、ここには、もっと大きな動物、灰色狐、アナグマ、ボブキャット、そして、ビッグホーンなども生息しています。



ブロード・テイル、ならびに、クロあごハミングバードが、ともに、

夏の間、このパークの中で、毎年、毎年、同じ巣を共有して、ひな鳥を産みます。



ステラズ・カケスのようなここに一年中いる鳥達は、

ピクニック地域や、崖の住居に通じる路などで、彼らを脅かすような見学者がいると、誰にでも、ガーガーとうるさくわめきたてるのです。

ここに生息する鳥とそのほかの生物達

ここで、最も良く見かける鳥は、黒光りしている渡りカラスで、お互いがうるさく鳴きわめき、頭の上を飛んでいます。そのほか、一年中ここに生息している鳥達のなかには、低木に住んでいるカケス、ステラズ・カケス、平原に住むシジュウカラ、山アメリカコガラ、白胸ゴジュウカラ、そして、黄金ワシなどがあります。1990年には、モアフィールドやプレーター渓谷領域に繁殖していた野生の七面鳥が、ここに再び戻されました。まさしく献身的な鳥の観察官たちが、北の急斜面の崖に沿って生息している外来の隼たちをひそかに見張っているのです

ここに来る見学者達は、皆さん、ここに滞在している間はどんなヘビには遭いたくはないでしょう。夏の終わりから、秋の初めにかけて、見学者の中には、道路を横切ったり、或いは、わき道に沿って歩いているタランチュラを見たとき報告している人もいます。彼らは、残忍な格好をしているように見えますが、実際には、非常におとなしい動物なのです。

考古学的な発掘調査で、今日見られる動物や植物などの種類は、前史時代にこのメサ ベルデに生息していたものと同じものであるということが明らかにされています。ガラクタの山の中から、沢山の動物や鳥の骨が見つっていますが、それらの一部は、道具の材料として使われていました。この公園での植物や動物達の種類の

多さは、まさに驚くべきものがあります。プエブロ族の先祖達が、そうした閉鎖的な自然環境のなかで、長い間生きてきたのだということに、何の疑いもないのです！



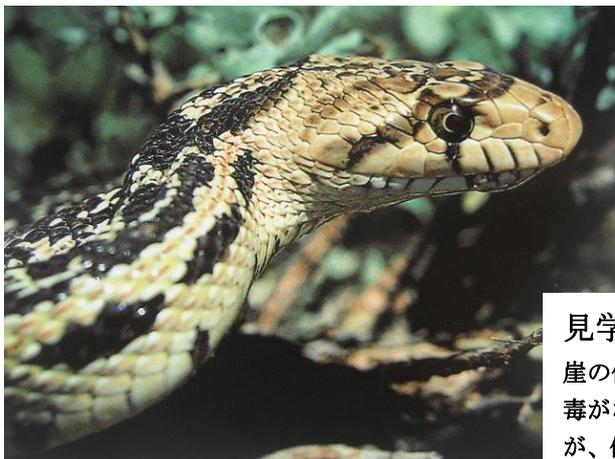
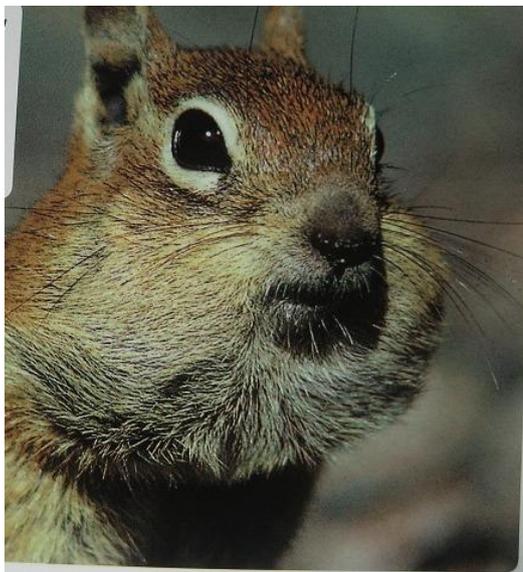
JOHN P. GEORGE

夕方になると、スプリース・ツリー・ハウス近辺には、

50~100羽近くのトルコハゲワシが頭の上を飛び交い、そして、夜になるとダグラス・フィアー・ツリーに休みためにやってきます。

黄金色した毛皮のグランドリス、

彼らは、モアフィールド・キャンプグラウンドに良く現れ、何時もえさを頬張っている。崖の住居の地域では、あっちこっちとせわしく動き回っているシマリスが主流であるが、子供たちは、どちらの動物も喜んでみている。



見学者は、時に、太いへビを見ることがある

崖の住居に行く道に入ると、蛇に出くわすことがある。彼らは、毒がなく、ネズミとか、そのほかの小動物を狙っているのであるが、他のものに邪魔をされるのをとても嫌がる。時に、ガラガラへビのようにとぐろを巻いていて、人を怖がらせて遠ざけるために、シューと音を立てることがある。

参考文献

Elmore, Francis H. Shrubs and Trees of the Southwest Upland. Globe, Arizona: Southwest Parks and Monuments Association, 1976

Dodge, Nate N. Flowers of the Southwest Deserts, Tucson, Arizona: Southwest Parks and Monuments Association, 1985

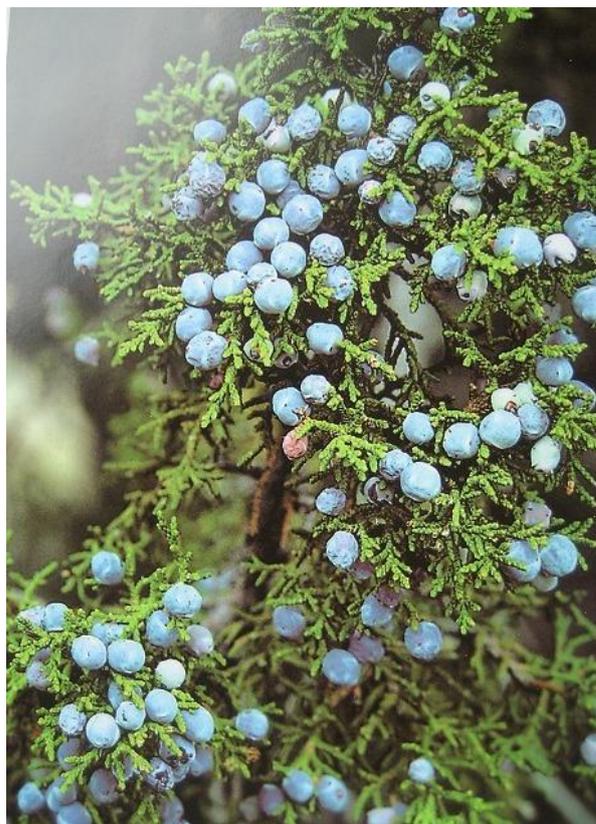
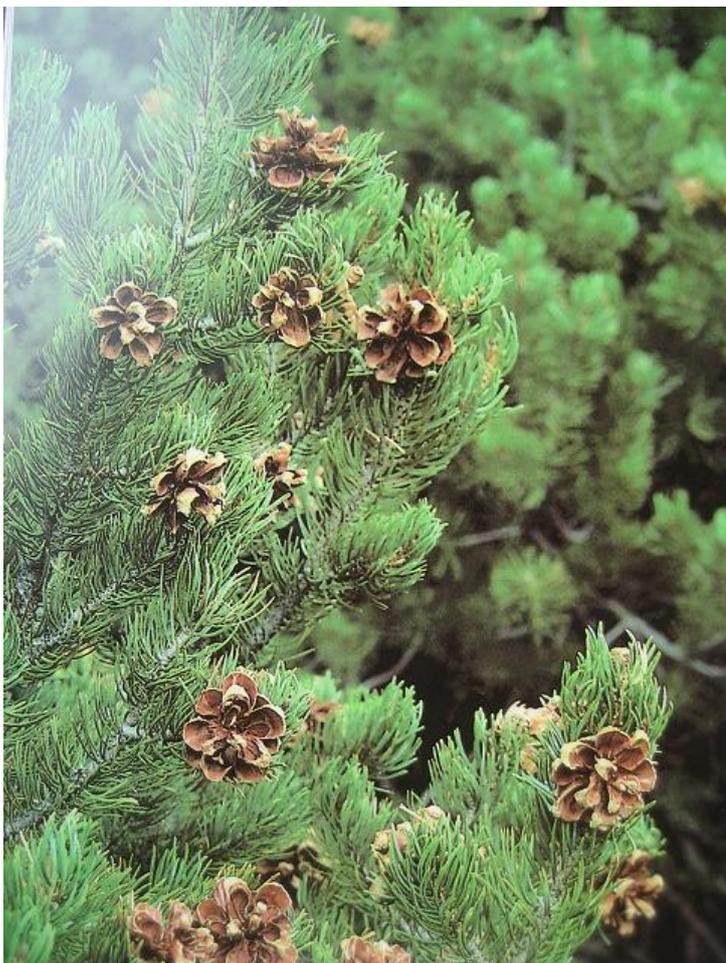
Fisher, Chris C. Birds of the Rocky Mountains. Edmonton, Alberta, Canada: Lone Pine Publishing, 1997.



きれいなトルコ石の色—小金色首巻きトカゲ

が、時に、熱心なカメラマンのためにポーズを取ってくれる。普通、体が大きく、色鮮やかな雄のほうが、雌より、よく目立つ。

有用な植物達



ピニオン・パインやユタ・ビャクシンの森が、このパーク一帯に繁殖している。

こうした、耐寒性の木々は、水分が極端に少ないところでも繁茂するほど、渇きに強いのである。ピニオンは、2・3年おきに、香りが素晴らしく、そして、とてもカロリーのある — ポンドあたり、5,000 カロリーといわれる、食料となるナッツの実をつける。原住民のアメリカ人たちは、この実を競って集める、が、彼らは、そのためには、小さな動物や、鳥達に負けては居られないのだ。ピニオンの脂は、樹脂のようなゴム性で、耐水性の籠をつくるのに使われた。青灰色のビャクシンの実は、強い匂いがするが、木からとったばかりのときには、刺激的で刺すような味がする。毛羽立ったビャクシンの樹皮は、素晴らしい寝床の材料で、プエブロ族の祖先たちは、オムツに使っていたと思われる。

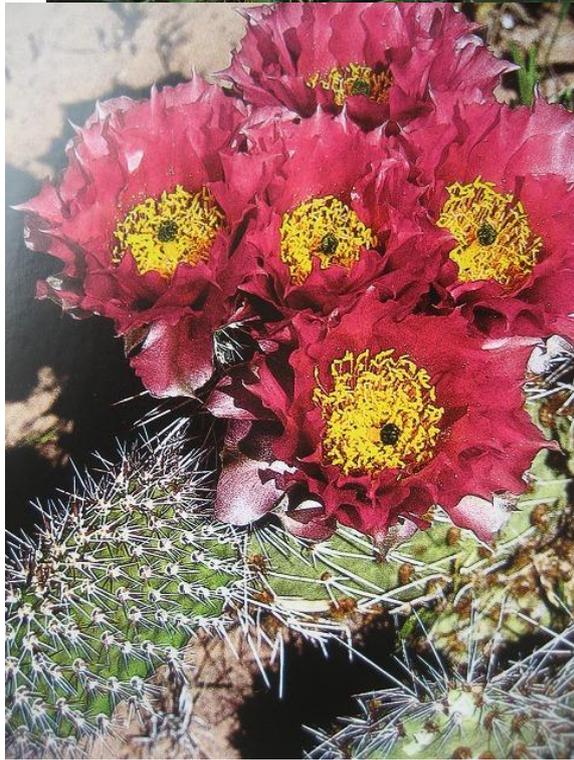
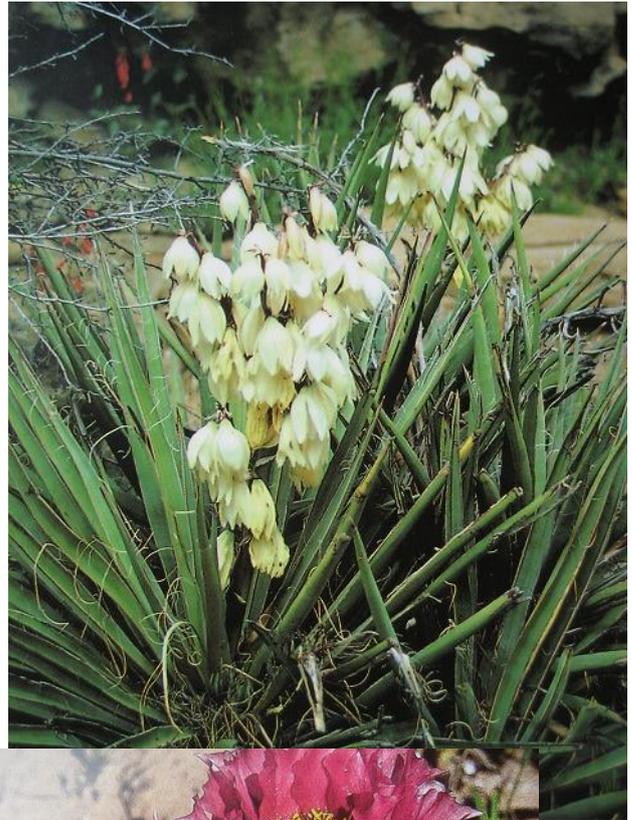
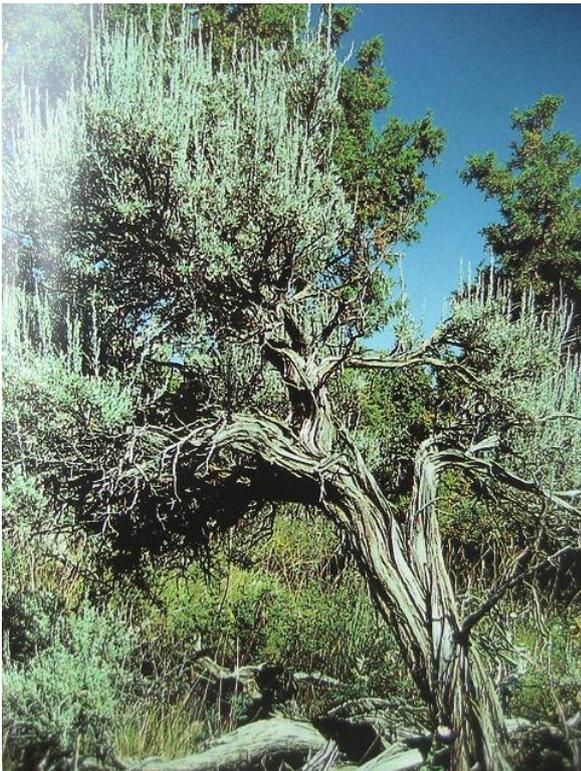


葉のない、茎の集まりのモルモン茶

は、ピニオン・パインやビャクシンの仲間である。薬用のお茶は、この植物から作られている。原住民アメリカ人は、その種を炒り、それをそのまま食べるか、或いは、粉にして食料にしていた。

パーカー帯に広く育っている、葉幅の広いユッカ

は、プエブロ族の祖先たちにとっては、最も役に立つ植物の一つであった。繊維は、綱、サンダル、すね当て、そして、前掛けなどに使われた。クリーム色の花は、おいしいサラダや、ポット・ハーブとなった。バナナのような実は、そのまま、或いは、料理されて食べられていたし、干されてケーキにもされていた。



なかには、ヤマヨモギに覆われた前史時代のままの場所

は、考古学者に発掘の価値があると訴えている。こうした、灰緑色の灌木は、一般的には、溪谷の深い底か、或いは、メサの頂上台地に育っている。これらは、明礬と一緒に煮立てると、緑色の染料ができる。また、その葉から取れるお茶は、催吐剤として使われた。

素晴らしい見栄えのヒラウチワサボテンの満開の花、6月

これらは、後に甘く、そして、ゼラチンのような食用の実をつける。ヒラウチワサボテンの茎は、そのトゲをこすり落とすか、或いは、焼いて取り除けば、そのまま 食べることができる。科学的な分析から、プエブロ族の祖先たちは、トゲがあつたにもかかわらず、これを食べていたことが分かった。

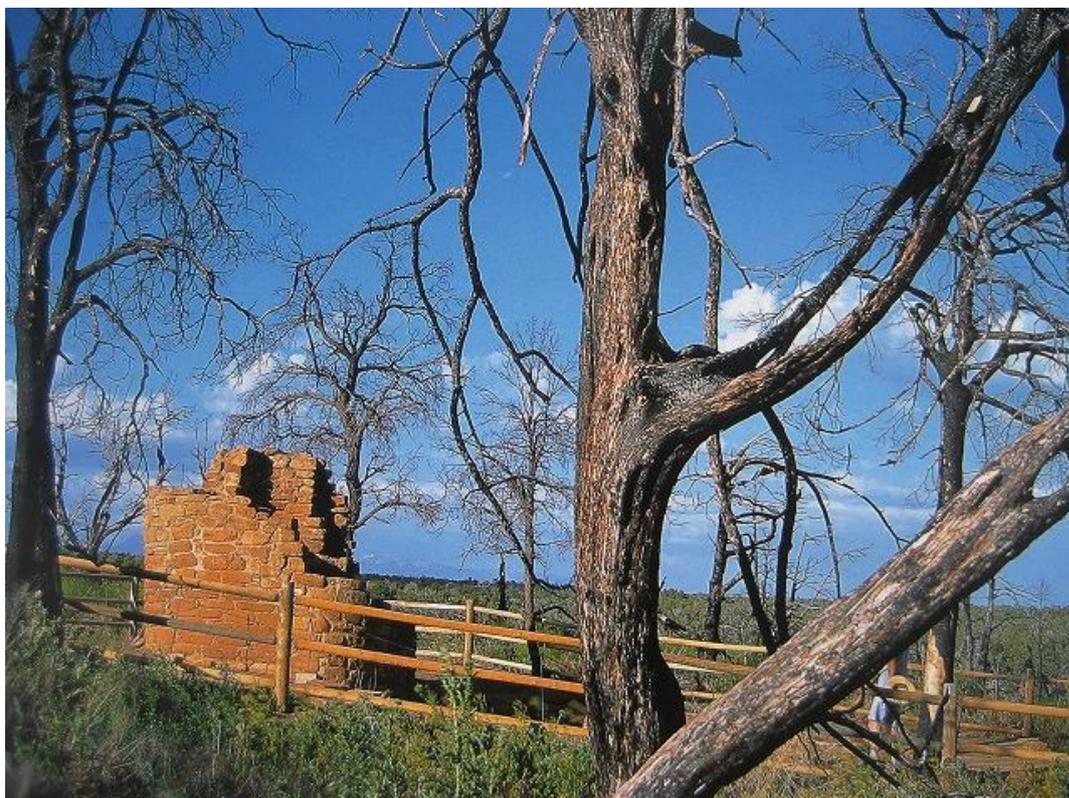
火事 そして.....生き返り



厳しい乾季の間の激しい火事は、

それ自身が異常な気象現象を起こしている。数千フィートにも立ち上る雲が、メサの頂上台地を横切って炎の壁を追い立てるとんでもない風を起こして、そして、その通り道のすべてのものを焼き尽くしているのだ。こうした、大きな被害をもたらす火事を止めることができるのは、恵みの雨か、或いは、すべてが燃え尽きるかだけだ。

最近このパークで発生した火事が、考古学、ならびに、自然の貴重な資源に重大な影響を及ぼした。2002年におきた、火事は、セダー・ツリー・タワーの周辺の植物、すべてを焼きつくした。ただ、この場所は、重大な被害を受けずにすんだ。

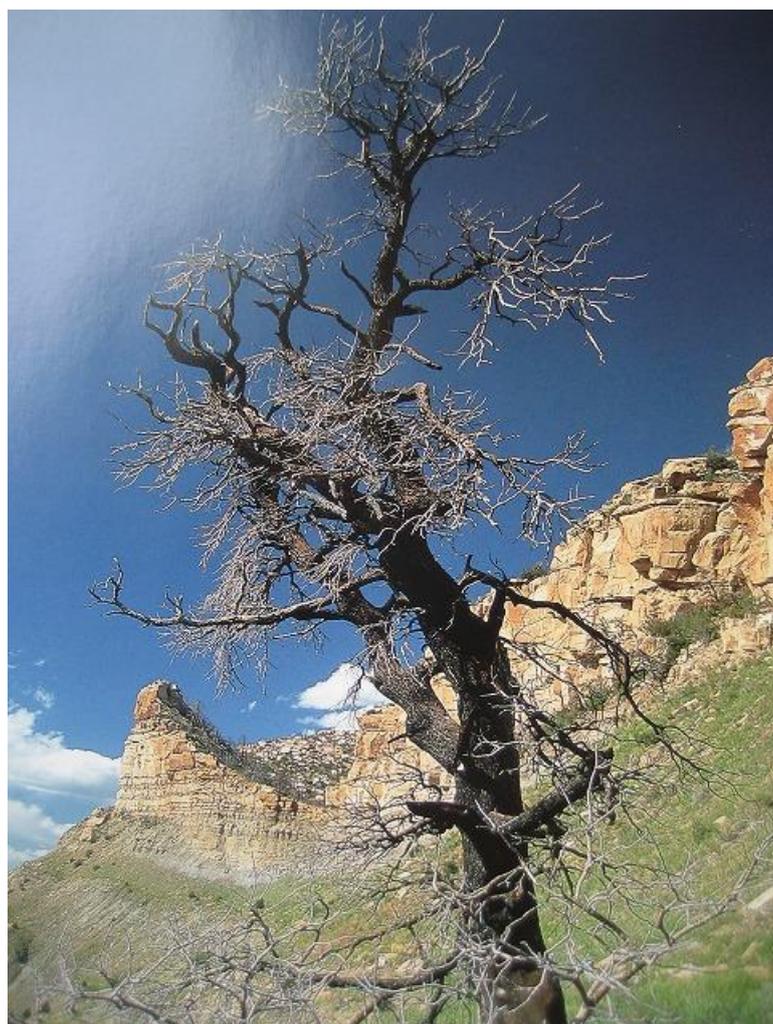


火事—自然の力

自然の火事が、いつの時代も、メサ ベルデの物語の一部であった。しかし、数年の間、ナショナル パーク サービスは、鎮静活動により、その火事を人工的に制御してきた。有害な燃料がいつでも転がっていて、乾季の周期が延び、猛烈な雷が落ち、大きな山火事を起こすのだ。1989年～2003年にかけて、メサ ベルデ ナショナル パークの敷地の50%以上が焼き尽くされた。

山火事は、砂岩を酸化してしまい、岩の表面を小さく砕き、或いは、板状にしてしまい、植物がなくなったことで、大地に侵食が起こるのである。そして、植物が焼け付くし、底に、何百という新しい考古学的に意味のある遺跡が発見されたのである。

山火事の研究により、あらかじめ定期的に燃やして、ピニオン/ビャクシンなどの森の密度を下げておくという、経験から生まれたこうした考えが、森をよりよい状態に維持する助けになるということが明らかになった。Burned Area Emergency Response (BAER) チームが、火事により破壊された地域を再生するために、内部の部署に組織された。こうした、観察と、研究の手段を使って、メサ ベルデ ナショナル パークは、将来にわたりその文化的、ならびに、自然の資源をよりよく守っていくことを望んでいる。



火事のもたらす良い影響としては、
 土壌を肥沃にするということ、そして、植物の発芽を促進するということがある。ガンベル・オークや葉幅の広いユッカ、そして、沢山の草が、それらの根に十分な水分が供給されるや否や、クロ焦げになった大地から、若い芽が出てくる。多分、メサ ベルデの景観は、新しい森が出現する300年くらい前なので、われわれの時代はずっと、ちょうどパッチワークのようにつぎはぎになったままの形で残るのであろう。

沢山の資源を燃えつくす火事は、

大変な被害を残すが、その一方で

新しい生命をも、もたらすのだ。

パーク・ポイントに立ち、
数百年も昔のプエブロ族の祖先たちと
同じような眺望を見ながら、あらゆる方向に、
何マイルも先を見渡すことは、
なんとも素晴らしい思いがするものだ。

将来への期待

文化保護財としての、その重要性のために、メサ ベルデ ナショナル パークは、1978年に、世界文化遺産として登録された。世界文化遺産が登録されたのは、この時が最初である。この、栄誉は、ナショナル パーク サービス 全域にわたってもたらされるべきものであるが、わずかに限られた場所ばかりが、ヨーロッパ人や、そのほかの海外からの見物客により、頻繁に訪問されているのである。

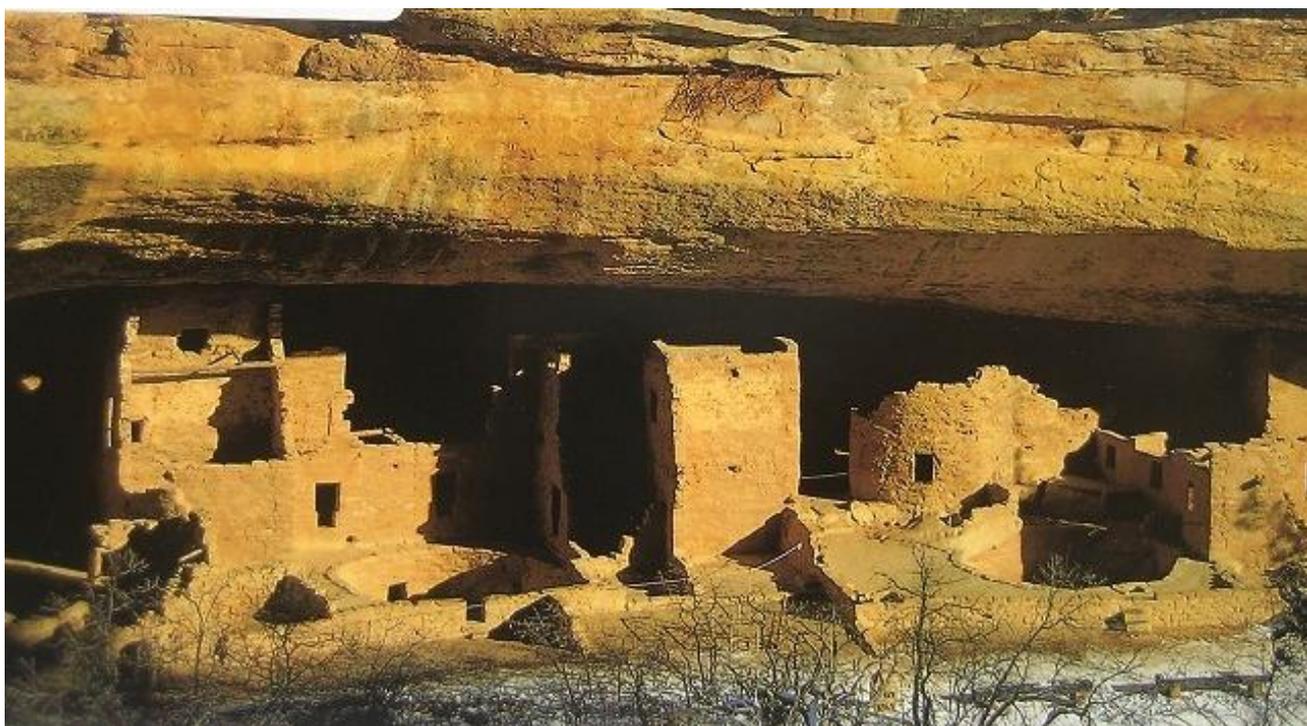
メサ ベルデは、5,000箇所くらいの考古学的に意味のある場所が保護のための管理されている特異的な地域なのである。こうした文化的に貢献する遺産を守ることに、われわれは、また、危険に曝された植物、絶滅の危機に瀕した野生の動物達、そして、アメリカの南西部に広がる広大な眺望をも、保存しているのである。パーク・ポイントに立ち、数百年も昔のプエブロ族の祖先たちと同じような眺望を見ながら、あらゆる方向に何マイルも先を見渡すことはなんとも素晴らしい思いがするものだ。

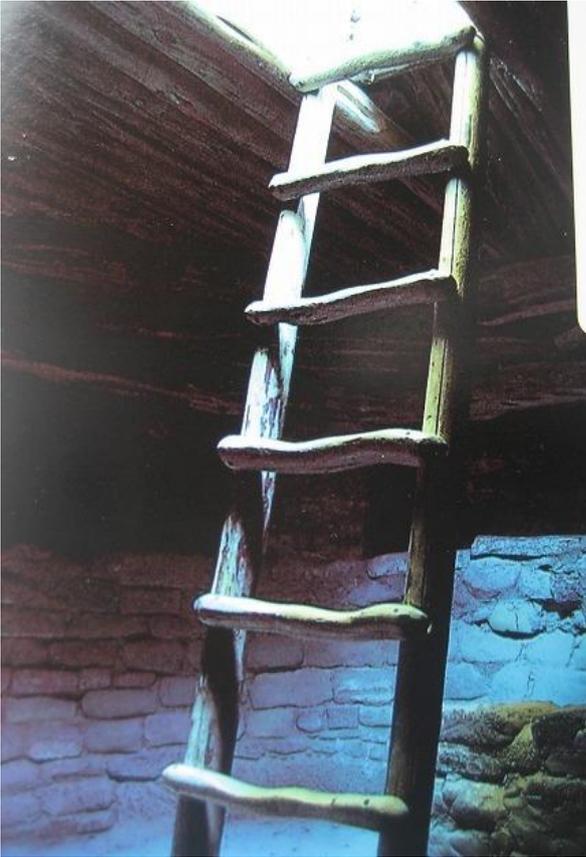
チャピン メサ 博物館のちょうど真裏に位置している

スプルス・ツリー・ハウスは、ここを訪れた見学者達が最初に目にする崖の住居です。ここは、一年を通じて見学することのできる唯一の場所なのです。ボックス・キャニオンの先端にある泉が、この辺り一帯にきれいな水を供給してくれています。

貴重な人工遺産を保存すること

物質的な富に対する社会の執着から、陶器や竈工芸品のようなとても貴重な工芸遺産が、ただ単なるそれらの金銭的な価値のみにこだわる遺産ハンター達により、脅かされている。どれだけ沢山の場所が、こうした、欲深い輩たちによ



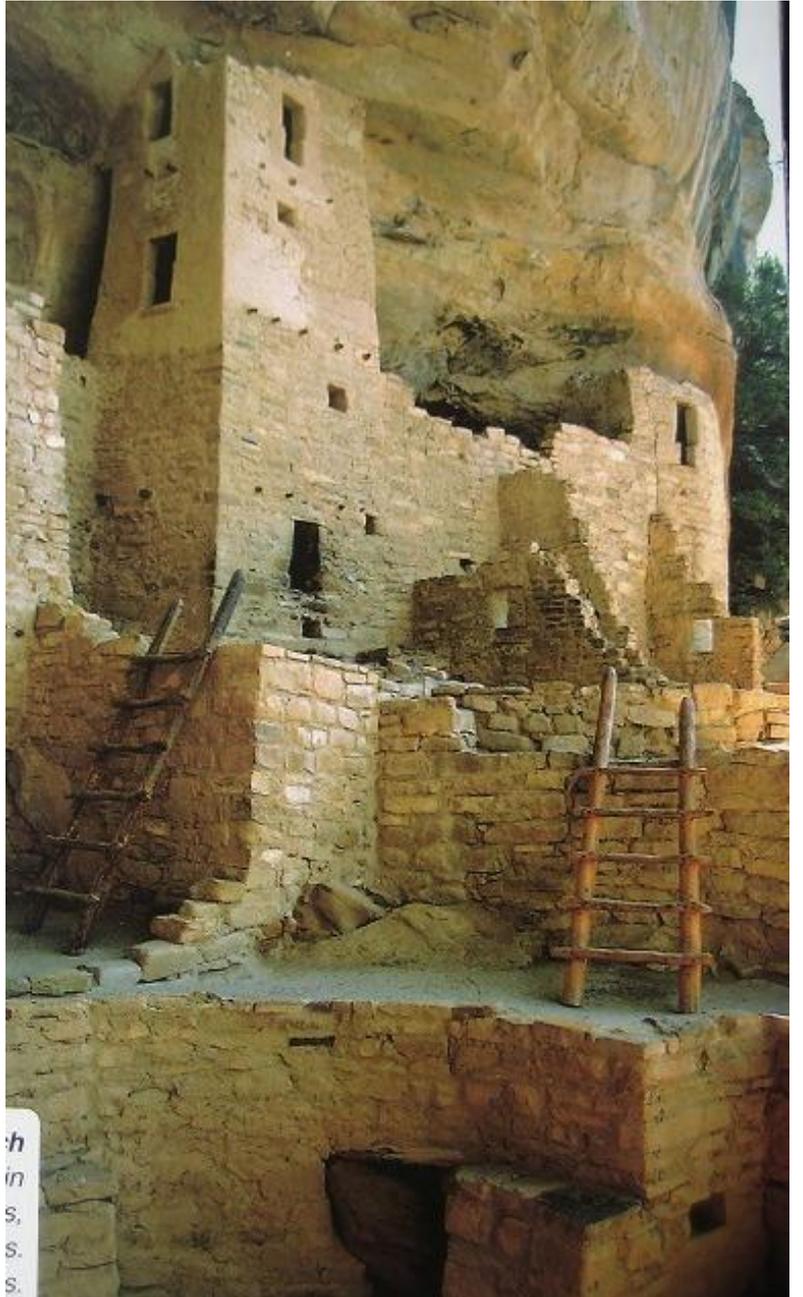


このキバの床から、天井に届いている木の梯子

これは、スプルス・ツリー・ハウスに見られるものです。部族のメンバー達が、この梯子を降りて、非常に大事な儀式に加わっていたことを思い描いてください。われわれは、1200年代の後半に起こった大干ばつのときに、どれだけ彼らは、議論したのか、今できるのは、只、推し量ることのみです。神は、怒っていたのでしょうか？

りあらされていることか。考古学的文化遺産保護条例のような法律だけが、部分的に、アメリカの考古学的な重要地域の略奪を制御することに成功しているだけである。

メサ ベルデは、文化遺産保存の先見の明のいい例である。その 52,080 エーカーが、ナショナル パークと言う地位により保護されているのである。パークレンジャー達は、ここに来る見学者達に、ここで彼らが発見した、残されていた陶器の破片、或いは、そのほかの工芸品の重要性について、はっきりと理解するように勤めている。子供たちは、わくわくしながら、陶器の破片を発見し、そして、それが、数百年も昔のものであることを知るので。彼らは、それにますます興味を持ち、そして、レンジャーがどうすれば、他の子供たちも同じような経験をすることができるかを説明すると、彼らは、それを見つけた場所に、そっと置いていくのです。こうして、子供たちは、実に、ナショナル パークが提供しているものに、その思いを大人になるまで持ち続けて、感謝することを学ぶのです。



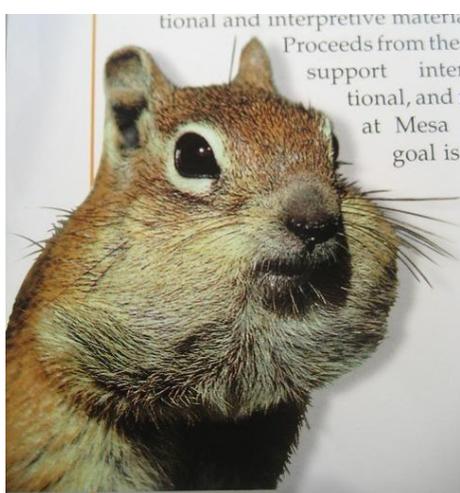
崖の宮殿にある、四階建ての“タワー”

は、プエブロ族の祖先たちが住居に住んでいたときの、共同住宅のように見える。崖の宮殿は、こうした石器時代の石工の工芸技術を説明するかのように、いろいろな段丘のレベルのところに建てられていた。見学者たちは、その高さで、正確に角のでた真っ直ぐになった壁を見て、感嘆するのです。

メサ ベルデ ナショナル パークのすべて

メサ ベルデ 博物館協会

メサ ベルデ博物館協会(MVMA)は、私的な、非営利の組織で、1930年に、ナショナル パーク サービスと、メサ ベルデ ナショナル パークの共同事業を支援する目的で設立されました。積極的な本の発行とメサ ベルデの中での本の販売を実施することで、MVMA はここに来る見学者達に、教育的な、そして、解説的な資料を提供しています。こうした資料の販売により得られた利益は、メサ ベルデで実施される、解説、教育、ならびに、研究プログラムを支援するために使われています。MVMA の最終的なゴールは、メサ ベルデ ナショナル パーク、ならびに、あらゆる公的土地における文化的、ならびに自然の資源を保存することの重要性を一般大衆に理解してもらうよう推進することなのです。さらに、詳しい情報が必要な方は、www.mesaverde.orgのオンラインブックストアを訪問ください。



メサ ベルデ

ジュニア レンジャー

ジュニア レンジャープログラムとは？

探検 — こそ、メサ ベルデ ナショナル パークに来たときに、貴方がすることなのです。そして、ジュニア レンジャーとなる目標を達成してください。崖のハウスの一つを訪ね歩き、そして、プエブロ族の祖先たちがどんな風にして壮観な家を建てたのか、勉強してみてください。彼らがどんな風に生活していたのか、そして、彼らは、毎日何をしていたのかを理解してください。また、プエブロ族の祖先たちは、狩をするのにどんな道具を使っていたのか、何を身にまとい、そして、食べていたのか、良く観察してください。レンジャーステーションのどこからでも、ジュニア レンジャーの申請書を レンジャーにお願いし、あなたの年齢に合わせて選んだ活動目標を完成してください。そして、それを、ジュニア レンジャーの記章をもらうために、レンジャーに渡して、貴方自身のジュニア レンジャー バッジを受け取ってください。

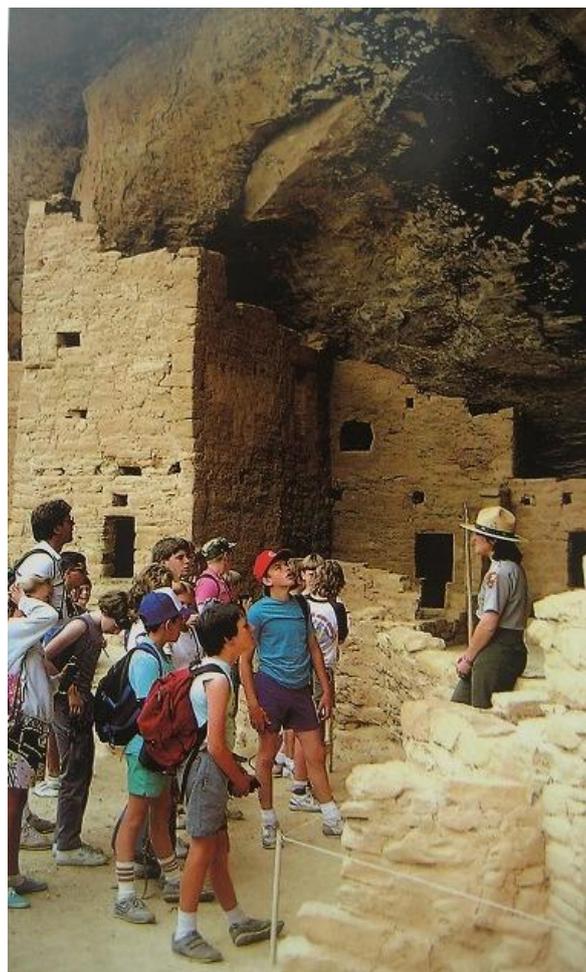
誇りを持って、それを身につけてください！



Mesa Verde National Park
Park elevations range from 6200 feet in deep canyon bottoms to 10,000 feet on the rim.

あとがき

プエブロ族の祖先の遺産は、現代社会のために、いつまでも続いている別のメッセージを持っている。1200年代に、彼らは、大地を使いすぎ、小屋を建てるための資材を使い果たし、そして、野生の動物達の狩をやりすぎた。それは、ちょうど、20世紀の人々がやってきたのと全く同じ風にしてなのである。われわれは、毎日、ニュースで、深刻な環境汚染の問題を、オゾン破壊のことを、そして、人工過剰の問題を耳にしている。われわれが、プエブロ族の祖先たちに何が起こったのかを見ると、多分、それは、われわれの将来についての教訓となるのであろう。歴史そのものは繰り返す。そして、メサベルデは、まさしく、われわれが望んでいることと、そして、必要とすることを注意深く考える場所なのである。もし、10人のうちのただの1人でも、このメッセージを心に留めておいたら、メサベルデは、毎年、数千人もの人たちを教育しているということになる。プエブロ族の祖先たちに感謝をしよう — 彼らの精神は、今もなお、われわれと共にあるのだ！



知識の豊富な、レンジャー/説明員は、ツアーを案内しながら、

これらの資源の正しい知識と、保護についての考え方を提供している。

訳者から

私は、ここを訪れる日本人の観光客の方が、自然を守るということがどういうことなのかを学んでもらうためにこの本を訳しました。

鈴木 誠二

裏表紙

太陽の神殿は、素晴らしい日を体験する格好の場所です。

Terry Donnelly 撮影

裏表紙返し

ここに住んでいた家族を想像して見てください。これは、彼らの住居で、自分達を守る方法だったのです。

Bruce Hucko 撮影

